

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第19集

日影林遺跡

—上黒田平林地区住宅団地造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

1989.4

東京都 株式会社 木下工務店
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第19集

日影林遺跡

—上黒田平林地区住宅団地造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

1989.4

東京都 株式会社 木下工務店
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

序

昭和61年から株式会社木下工務店が上黒田^{たいらばやし}平林地籍で住宅団地建設のため宅地造成されるについて、当該地が当町埋蔵文化財包蔵地の日影林遺跡のほぼ中央部にあるため、事前に当町埋蔵文化財発掘調査団長今村善興先生や長野県教育委員会文化課の参画と指導を得て、その保護について協議したもので、あらかじめグリット掘りによる試掘調査を行い、その結果を見て必要箇所をさらに発掘調査し記録保存することにしました。

この調査のうち現場での発掘調査は昭和61年9月に試掘調査を開始して以来、町内の他の発掘調査の日程と調整を計りながら、翌昭和62年4月上旬に終了しました。しかしながら相次ぐ町内の埋蔵文化財発掘調査の実施を併行させなければならない状況にあったので整理作業から報告書作成は平成元年度に完了させることにしました。

この調査の実施にあたっては株式会社木下工務店代表取締役の木下長志さんをはじめとして同店飯田営業所の副社長赤羽治良さん、部長木下圭司さんほか社員の皆さんの深い御理解とこの調査の多額な費用の大方を御負担いただくなど絶大な御協力をいただきました。このことは誠に有り難く厚く感謝の意を表します。

調査の結果は調査団長今村先生におまとめいただき本書に記録されたとおりです。当遺跡は当町にとって有数のもので縄文期をはじめとして多くの遺構と遺物が検出され、今後の当町の考古学にとっても重要な資料を提供してくれました。これ等大量の資料は大切に保存し、後世のため伝えてまいりたいと思います。

今日開発と埋文保護の調整をどう計るかは大きな課題となっていますが、今回の調査はその意味からも非常に大きな意義があり、あらためて木下さんの誠意を讃えるものです。

末尾ながらこの調査の完了まで献身的に尽された今村調査団長をはじめ発掘作業や整理に従事いただいた調査補助員、作業員の皆さんに厚く御礼申し上げます。

平成元年4月20日

上郷町教育委員会

例 言

1. 本報告書は、昭和61・62年上郷町黒田平林地籍における木下工務店の住宅団地造成工事に伴い、木下工務店社長木下長志と上郷町教育委員会教育長吉川昭文との委託契約に基づく「日影林遺跡」の緊急発掘調査の報告書である。
2. 現地の試掘・検出の発掘調査作業指導は、調査団長今村、調査補助員林敏・林貢・米山・伊藤が担当している。
3. 検出調査のあと他地籍の発掘調査・他町村の発掘調査が連続したために、折々に整理作業を進め平成元年2月に製図作業をしているので、遺構担当者の交代もあって考察に不備なところもある。
4. 土壙群については土壙の数が多いので、地域的にまとめて図示し特徴的なものについて選択報告している。
5. 本書の作成にあたり現地での計測・記録図の作成は今村・林敏・林貢・米山があたり、土器計測は今村・林貢、石器実測は福田、土器拓本撮りは林貢・福田・今村俱、遺構図の作図製図は林貢・今村があたっている。
6. 現地での写真撮影は今村が担当し、遺物の写真撮影は唐木孝治氏に依頼した。
7. 本書の編集・報文の執筆は今村があたっている。
8. 出土遺物・記録図面は一括して上郷町歴史民俗資料館に保管されている。

本文目次

序

例言

目次

I. 調査の経過	1
1. 保護協議	1
2. 試掘調査	1
3. 検出調査	2
4. 調査団組織	3
II. 遺跡の立地と環境	4
1. 自然的環境	4
2. 歴史的環境 (遺跡を中心にして)	4
III. 調査の結果	8
1. 遺跡の概要	8
2. 遺構と遺物	8
(1) 1号住居址	8
(2) 3号住居址	13
(3) 2号住居址	15
(4) 土壌群	15
① ピットを持つ土壌	16
ア. 土壌 8	16
イ. 土壌 10	16
ウ. 土壌 12	16
エ. 土壌 33	21
オ. 土壌 44	21
カ. 土壌 61	21
キ. 土壌 71	22
ク. 土壌 42・50	22
② 特長のある土壌	22
ア. 土壌 19	22
イ. 土壌 24・25・27・28・73	22

③ 土器片出土の多い土壌	23
(5) 集石遺構	23
① 集石遺構 1	23
② 集石遺構 2・3	23
(6) 焼土群と土器集中地	23
(7) その他の遺物	23
IV. 調査のまとめ	25
1. 縄文時代後期の土壌	25
2. 日影林遺跡発掘調査の意義	26

挿図・図版目次

第1図	日影林遺跡位置図（周辺遺跡）	6
第2図	試掘調査グリット図	9・10
第3図	遺構全体図	11・12
第4図	1号住居址・2号住居址	14
第5図	土壙群（1）上方、33・8・44周辺	17
第6図	土壙群（2）中央東側、（10・12・配石遺構を中心にして）	18
第7図	7号住居址と土壙群（3）（下方）	19
第8図	土壙群（4）下方、集石2・3	20
第9図	1号住居址・土壙12・33出土土器、グリット出土土製品	27
第10図	1号住居址・土壙76出土土器拓影・1号住居址出土石器	28
第11図	3号住居址出土土器拓影・出土石器、グリット出土中期中葉土器拓影	29
第12図	2号住居址出土土器	30
第13図	ピットを持つ土壙8・10・12出土土器拓影	31
第14図	ピットを持つ土壙12出土土器拓影	32
第15図	ピットを持つ土壙33・42・44出土土器拓影	33
第16図	ピットを持つ土壙42・61・71、周辺出土縄文後期土器拓影	34
第17図	土壙（26・28・31・38・50）出土土器拓影（1）	35
第18図	土壙（59・60・63・65）等出土土器拓影（2）	36
第19図	土壙出土土器拓影（3）	37
第20図	グリット等出土代表的土器拓影（1）	38
第21図	グリット等出土代表的土器拓影（2）	39
第22図	グリット等出土代表的土器拓影（3）	40
第23図	1・3号住居址、土壙・グリット出土小型石器	41
第24図	土壙等出土石器	42
第25図	グリット等出土石器（1）主として上方	43
第26図	グリット等出土石器（2）主として上方	44
第27図	グリット等出土石器（3）主として下方	45
第28図	グリット等出土石器（4）小型石器・横刃形・磨製石器・錘石	46

写 図 目 次

- 写図1 柏原登り口から見た日影林遺跡
- 写図2 試掘調査時の遺跡（西南から）
- 写図3 1号住居址（西から）・出土片口形土器
- 写図4 2号住居址と石組カマド
- 写図5 3号住居址周辺と石囲い炉
- 写図6 土壙群全景（西南から）
- 写図7 上方と下方の土壙群・集石遺構2・3
- 写図8 ピットを持つ土壙12（上面の焼土とピット・下層の土壙）
- 写図9 ピットを持つ土壙10・44
- 写図10 掘りの深い土壙19とグリットの土層
- 写図11 集石遺構2・3
- 写図12 1・2・3号住居址・ピットのある土壙出土土器
- 写図13 土壙・グリット出土土器
- 写図14 1・3号住居址・土壙・グリット出土石器・土製品
- 写図15 グリット出土石器

I 調査の経過

1. 保護協議

昭和60年頃から住宅団地造成工事が進んでいる上黒田平林地籍は以前から縄文時代中・後期の濃密遺跡と知られたところであるから、昭和61年2月上郷町教育委員会では施事業業者木下工務店に対し、埋蔵文化財の保護について通知が出されている。

その後木下工務店と上郷町教育委員会での事前協議が進み、昭和61年9月5日長野県教育委員会文化課・上郷町教育委員会・木下工務店による保護協議が成立して、試掘調査の実施が決定した。試掘調査は9月19日から10月7日まで実労12日間で60グリットを掘った。東側道路沿いは礫群が多く遺物出土は少なかったが、中央農道沿い東側では平安時代、縄文時代中・後期の遺物出土は多く、住居址・土壙・ピット列の重複も見られたので検出調査の継続が必要となった。

10月6日県教育委員会文化課芦部指導主事の現地指導を得て、木下工務店・上郷町教育委員会の協議の結果、改めて検出のための発掘調査が決定した。この年は日影林遺跡のほかに南条棚田遺跡の第2次発掘調査が予定されていて、継続調査は不可能なために次年度に調査せざるをえない状況であった。昭和62年度はこのほかにも土地改良事業・道路改良事業が多く調査体制強化の必要に迫られ、県教育委員会からも調査体制強化の依頼が成されていた。その後教育委員会・町理事者の協議が進み専任職員採用が決定したので、3月から検出調査に入ることになった。

検出調査は昭和62年3月2日から4月8日まで24日間実施し、縄文時代後期・平安時代の住居址、数多くの縄文時代後期の土壙が検出された。調査報告書作成の整理・製図作業は現地の発掘作業が続いたために、平成元年1月から本格的に進め4月報告書刊行の段取りになった。

2. 試掘調査

試掘調査は昭和61年9月21日から開始している。調査地は5736-3・5736-4番地を中心にして東側の町道に並行して基準線を決め、5736-4番地のほぼ中央用地買収済の境界線を基点にしてA地区Aとし、北側上方へグリットを設定した。中央にある南北方向の農道沿いを50として東へ51～西へ49～のグリットにした。

B・F列の一部からグリット掘りに掛かったところ東側は大石・礫群が多く遺物出土は少ないが、南側では耕作土・黒色土・黒褐色土からの遺物出土が多い。上方に行くにしたがって包含層が厚く縄文時代中・後期の遺物出土が目立ち、中央部に低地があり北・西側に遺物が多い状況はますます顕著になった。9月26日に上方B地区A61から縄文時代の片口形土器が出土し1号住居

址が確認され9月30日にかけてR57で平安時代の住居址・Q50周辺で住居址と土壙の重複が確認されて、広範囲に互る遺構の存在が予想されるに至った。10月4日にかけて遺物の出土の範囲を確認するためにグリット掘り続け、調査地の東側は遺物が少なく中央に低地があり農道沿い東側一帯は上下全域にかけて縄文時代中・後期の遺物包含が多く、住居址・土壙・ピットの多いことが確認された。

中央農道沿いから西側の町道に掛けた傾斜地は農道沿いには遺物出土はあったが、西上方は遺物出土が少なかったので宅地造成工事の実施を了解し、農道沿い東側一帯の検出調査を改めてすることにして10月7日試掘調査を終了している。

3. 検 出 調 査

昭和62年1月になって木下工務店から度々検出調査の早期実施の要請があったが、南条棚田遺跡の調査報告書作成作業があること・調査体制の増強がなくては調査遂行が困難であること等から延び延びになっていたが、双方のめどが付いたので昭和62年2月28日に資材を運搬して3月1日から検出調査に掛かった。現地は積雪が15cmほどあり検出には不向きな状況であった。テント設営のあと中央農道沿いから中ほどの低地にかけて重機による排土作業をする。調査地は傾斜があり黒色土中から縄文時代後期の遺物包含が多いために深い排土は難しく、表土下50cm以下は手掘り作業であるから検出には困難を極めた。

重機による排土作業と並行して上方の1号住居址の周辺・焼土群の検出にかかり、1号住居址の輪郭はほぼ掴めたが焼土周辺は黒色土は深く正体が掴みにくかった。住居址の存在は少なく土壙・配石遺構の多出が予想されるので、3月5日からは重機排土のあとの整地・トレンチ毎の掘り下げ作業の連続であった。黒色土中に縄文時代後期の土器集中部があったり、平石等が発見されても遺構の検証が成されないまま掘り下げの進んだところもある。

3月16日南条矢崎地籍の町道改良工事に伴う緊急の調査があったり、昭和62年度土地改良事業に伴う垣外・ミカド・ツルサシ遺跡の調査打ち合わせ会等が続き本格的な検出作業に戻ったのは3月24日であった。1号住居址の検出は終了し、A地区上方の土壙検出・2号住居址の検出を進めた。数多い土壙のなかには掘り方が深く、回りにピットを持つ土壙8・10・12、ロームのマウンドをもつ土壙38を中心に検出作業を続けた。3月28日からは下方地域の土壙検出を進めたが、ここも同様に黒色土中に構築された土壙・集石等が多く検出に手間取ったが、4月4日までにはほぼ検出作業を終り4月6日に写真撮影・測量作業を済ませて4月8日現地作業を終了している。

この年は上郷町内の土地改良事業に基づく発掘調査に追われ、昭和63年度は今村が下条村・阿南町の発掘調査が続いたので、昭和63年4月～6月・平成元年2月～3月にかけて遺物計測・整図・報告書原稿作りをすすめ4月報告書が刊行されている。

4. 調 査 組 織

(1) 発 掘 調 査 団

調査団長	今村 善興 (長野県文化財保護指導委員)
調査補助員	林 敏 米山 義盛 伊藤 泉 (以上～63.3) 林 貢
作業協力員	今村 春一 北原 孝子 北原 利江 榎原 種樹 小林 薫
	下沢 貞満 杉本 優子 関島 安雄 玉本 安治 中田 好子
	長谷川瑞穂 原 祐三 樋口 勇造 福田 千八 向田 一雄
	吉川 正美 和田さかゑ 今村 倶栄 福田すえ子

(2) 事 務 局

上郷町教育委員会

吉川 昭文 (教育長)	篠田 公平 (事務局長 ～62.3)
菅沼 富雄 (事務局長 62.4～)	吉川 勝一 (事務局長補佐)
山下 誠一 (社会教育係 62.4～)	今村 美和 (社会教育係)

II 遺跡の立地と環境

1. 自然的環境

日影林遺跡の所在する長野県下伊那郡上郷町は、長野県の南端を南側と北側に走行する南・中央両アルプス山脈の谷間に広がる飯田盆地のほぼ中央に位置する。野底山・鷹巣山が北西にあり、そこを源とする野底川・土曾川が南流し飯田松川・天龍川に注いでいる。この両河川に挟まれて、東西に細長く続く面積26km²に及ぶ広大な緩傾斜地形の地域である。

北は土曾川によって飯田市座光寺・野底川上流地域では高森町・飯田市松川入に境している。西・南は鷹巣山・風越山から野底川下流・松川によって旧飯田市・旧鼎・旧松尾地籍に接している。この地域は南流する天龍川と、その諸支流によって形成されたいくつもの河岸段丘や広大な扇伏地の広がる場所であって、とくに上郷町の段丘・扇状地は広いので、原始・古代から現代までの優れた生活舞台が展開している。

『下伊那の地質解説』によれば、伊那盆地全域に形成されている伊那谷の段丘は火山灰土の堆積を中心にして高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱに大きく編年されている。上郷町にある段丘面は、中央に広がる下黒田・飯沼境の大段丘を境にして上段と呼ばれる洪積土壌の堆積する中位段丘・低位段丘Ⅰと、下段と呼ばれる沖積土壌の堆積する低位段丘Ⅱが何段かに構成されている。

この上段地域には低位段丘Ⅰの伊久間面（喬木村伊久間原規範）に属する黒田の段丘、中位段丘八幡原面（飯田市松尾八幡原規範）に属する柏原段丘とに大きく分類され、とくに黒田の段丘は広大な面積を占めている。これらの段丘は野底川の扇状地が浸食されて出来たもので、新しい扇状地と古い扇状地があって何回にも重なりあって現在の段丘と扇状地が形成された。柏原段丘と上黒田段丘の間に流れる野底川によって柏原段丘崖下・野底川右岸に形成される細長い段丘が日影林の段丘である。地域では平林といわれ野底川に東面する恵まれた地籍として古くからの生活地として利用されている。この扇状台地は南北300m・東西は上方で70m下方で30mに及び、標高は上方で610m・下方で580mである。

2. 歴史的環境（遺跡を中心にして）

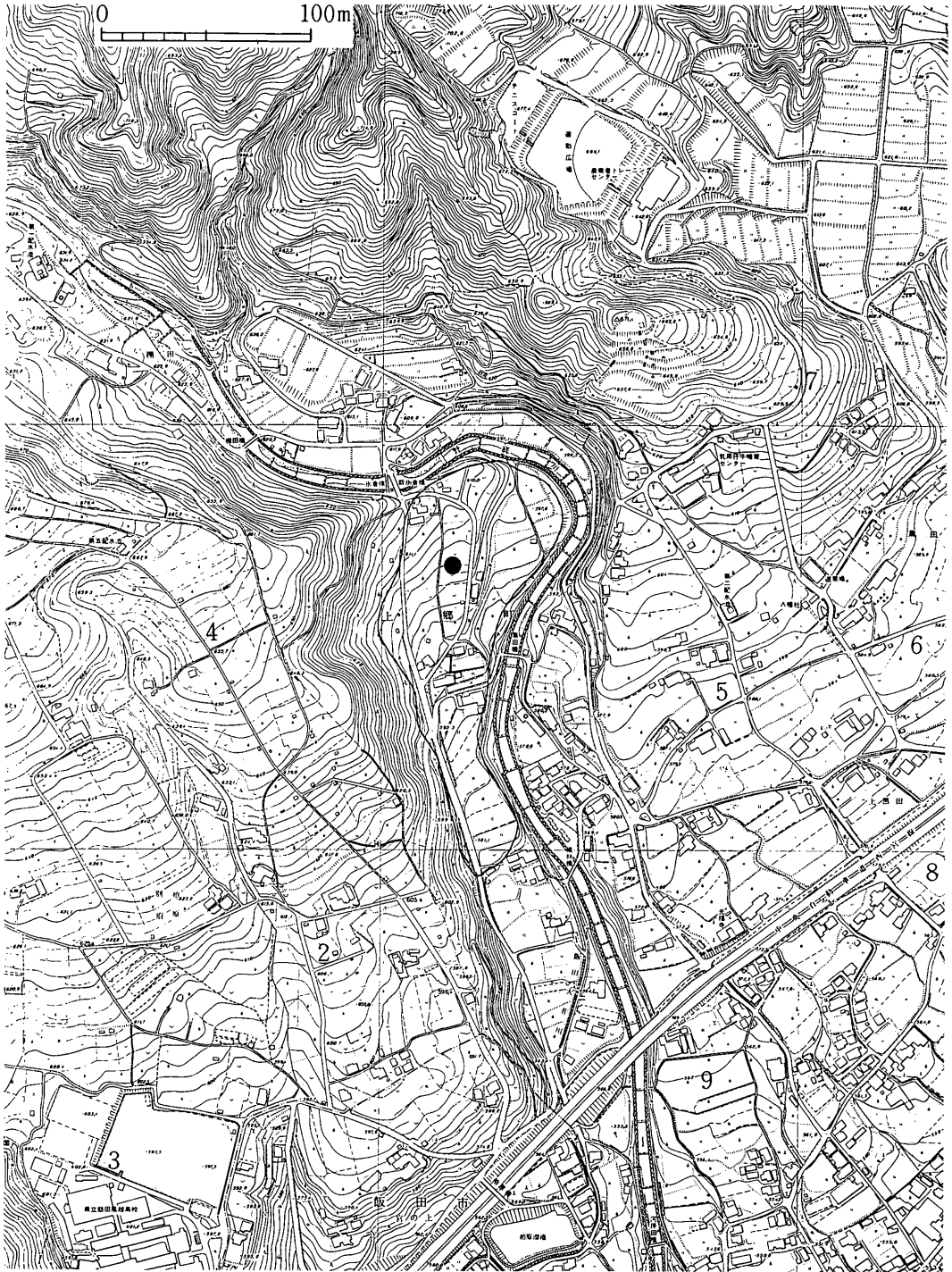
上郷町の遺跡は、昭和57年度の詳細分布調査によると、埋蔵文化財包蔵地67・古墳32・中世城跡3の合計104遺跡が確認され登録されている。昭和59年頃から各地の発掘調査が進み、新発見の遺跡もあつたり、古社寺跡等も含めれば更にこの数は上回る。

上郷町の遺跡を中心にした歴史の変遷を概観してみると、12000年以前の旧石器時代の遺構・遺物は現在のところ見付かっていない。上郷町最古のものは、上段の姫宮遺跡出土の表裏縄文式土器片・柏原 A 遺跡の石器剥片・栗屋元遺跡の有舌ポイントにより、縄文時代草創期の黎明を知ることができる。次の縄文時代早期になると比較的山寄りの八王子遺跡など 5 遺跡から、押型土器や繊維を含む条痕文及び撚糸文土器が出土している。平成元年 1 月の町道改良工事に伴う西浦遺跡の発掘調査でこの時期の竪穴式住居址が検出され注目されている。約 6000 年前の縄文時代前期の遺跡は姫宮・日影林・大明神原など 8 遺跡があり、今までは上段の中位段丘・低位段丘 I 地帯に限られていたが、昭和 61 年矢崎地籍の町道改修に伴う発掘調査で前期後半の住居址が検出され、下位段丘面での生活地も検証されている。

次の縄文時代中期になると爆発的に遺跡数も増加して、低位段丘南条面下段を除き、町内全域に遺構・遺物の発見が目立っている。中期の遺跡 49 か所中、日影林・八幡原・栗屋元・大明神原・増田遺跡等は集落址・遺物多量発見地域として注目されている。この後に続くやく 3000～4000 年前の縄文時代後期には遺跡数は減少し、上段を中心に 8 遺跡に留まっている。今回報告する日影林遺跡で住居址・土壙群が検出されたように、今後の発掘調査に期待される時期でもある。日影林の遺構検出・遺物多出土の結果は現在のところ上郷町では特筆される状況である。最終末の縄文時代晩期の遺跡は 3 か所知られていたが、昭和 62 年の矢崎下河原地区整備事業に伴う発掘調査で、東海系の条痕文土器・東北系の浮線網状文土器片が多量に発見されて注目されている。

次の弥生時代は水稻栽培が生活基盤となる新しい文化で、下伊那地方へは三河・尾張・美濃方面から伝播されたものと推定される。弥生時代前期の遺物は極少ないが、中期になると遺跡数は増大する。下段の低湿地周辺に集落の形成が推定されていたが、確証を得るまでには至っていなかった。昭和 60・61 年、南条下田圃地区基盤整備事業に伴う発掘調査で県下最初の弥生時代中期・後期の水田址が検証され脚光を浴びている。飯沼丹保では住宅造成に伴う発掘調査で住居址が 2 軒検出され、上郷町でもこの時期の遺構発見が続いている。この時期の遺跡の大半は下段の飯沼・南条・別府地籍に集中することから、低位段丘 II 地帯にみられる低湿地帯を利用する水稻耕作の展開が類推されている。やく 1800 年前の弥生時代後期になると、その遺跡は山麓地帯から天龍川氾濫原際に至る広範囲に 44 か所以上あり、高燥段丘上でも畑作・稲作が行なわれたものと思われる。その代表的なものは住居址 43 軒を検出した高松原遺跡であり、方形周溝墓 11 基と住居址 23 軒を検出した垣外遺跡・大量の土器群の充満した住居址を含め、集落の一部を検出した矢崎地区兼田遺跡・住居址 5 軒と祭祀的な土器群をもつ土壙列の検出を見た飯沼丹保遺跡等である。日影林の近くでは八幡原遺跡で住居址が検出され、西上の柏原上段地域で弥生時代後期の甕形土器が出土している。

古墳時代の遺跡は集落址と墓域とに区別される。上郷町古墳は煙滅古墳を含めて 32 基、その大部分は別府地籍の松川に面する台地端に立地し、一部が飯沼段丘崖下にある。いずれも後期古墳で、天神塚・番神塚両前方後円墳以外は円墳である。この頃の集落は古墳の近在にみられ、現



2. 柏原C 3. 柏原B 4. 柏原A 5. 八幡原
 6. 平畑 7. 薬師前 8. 赤坂 9. 町張遺跡

第1図 日影林遺跡位置図(周辺遺跡)

在のところ上段では明確なものがなく、下段の経済的基盤の豊かな地域で発見されている。遺跡数が多い割に集落址の発見例が少なく、古墳時代前期・後期の土師器を多量出土した南条の藪越遺跡・飯沼北の的場遺跡、別府の兼田遺跡に留まっている。遺物多量出土地籍は飯沼・南条・別府各地籍に多いので今後は発見例が続くものと思われる。

奈良・平安時代の遺物は町内全域で取捨できる。奈良時代・平安時代の選別は容易ではないが、平安時代の遺構・遺物は野底山山中から下段の天龍川氾濫原際の最下位段丘まで存在が予想される。生産域の水田地まで含めれば濃淡の差はあるが町内全域に広がっている。下段地帯の松川左岸、栗沢川・土曾川右岸に存在する中島・化石・高屋・丹保・堂垣外遺跡等では多量の須恵器片が発見される。昭和62年に発掘調査した矢崎遺跡（下河原地区）は100軒以上と推測される平安時代の大集落地で、大規模な鍛冶遺構が検出され、フイゴ羽口や鉄滓等の多量出土により上郷町の重要遺跡のひとつとなっている。近年実施された隣接地飯田市座光寺の詳細分布調査により、土曾川左岸地域では川に接する低地から、最低位段丘先端まで全域にわたって奈良・平安時代の遺物が採集されているが、この例は上郷町でも同様である。

野底川上流地域では八王子神社境内の八王子遺跡・福祉センターのある姫宮遺跡から平安時代灰釉陶器・住居址が発見されて注目されていたが、今回の日影林遺跡でも住居址が検出されほかにも遺物集中箇所があることから、平安時代の集落が存在していることが確認されている。以前に町道建設ときに縄文時代中期中葉の土器が発見されて、数少ない中期中葉の出土遺跡として注目されていたこの遺跡は、今回の発掘調査によって中期中葉の土器は少なかったが縄文時代後期の土器が多く、住居址・土壙群が検出され土壙のなかには特長のあるものも多くさらに注目されている。

III 調査の結果

1. 遺跡の概要

今から10数年前に町道改良工事中に一人の中学生により縄文時代中期中葉の土器が発見され縄文時代中期の代表的な遺跡とされてきた。その後上郷町の詳細分布調査により多くの黒曜石・縄文時代・平安時代の土器が表採されたり、耕作者によって収集された石器の量は多かった。今回の発掘調査による土器片・石器類の出土量は多くその出土範囲はほぼ調査地全域に及ぶが、とくに中央を南北に通る農道周辺から東側に掛けた一帯に多かった。試掘調査で確認されたように調査地中央部（農道と東側町道の間）に低地があって（最低表土下195cm）、西と東が高い地形である。この低地の西側東南斜面と上方に遺構・遺物多出地があるようで、周辺耕作者の話によっても西側と北側上方からの遺物出土は多いようである。

調査の結果は予期された縄文時代中期中葉・後葉の遺物出土は多いわりに住居址等の遺構が発見されなかった。黒色土の堆積が余りにも厚く A 地区 X 列から B 地区にかけては黒色土下が未調査であったこともあるが、調査地外上方に生活地の主体があると思われる。検出された遺構の大部分は縄文時代後期で、住居址・土壙群・集石・配石遺構であり、後期前葉の土器・石器が多い。

主な遺構

縄文時代土器集中地区(土壙群?)、縄文時代後期住居址2、平安時代住居址1、縄文時代中期中葉土壙1、縄文時代中期・後期土壙75以上、縄文時代後期集石遺構3、時期不詳配石遺構1。

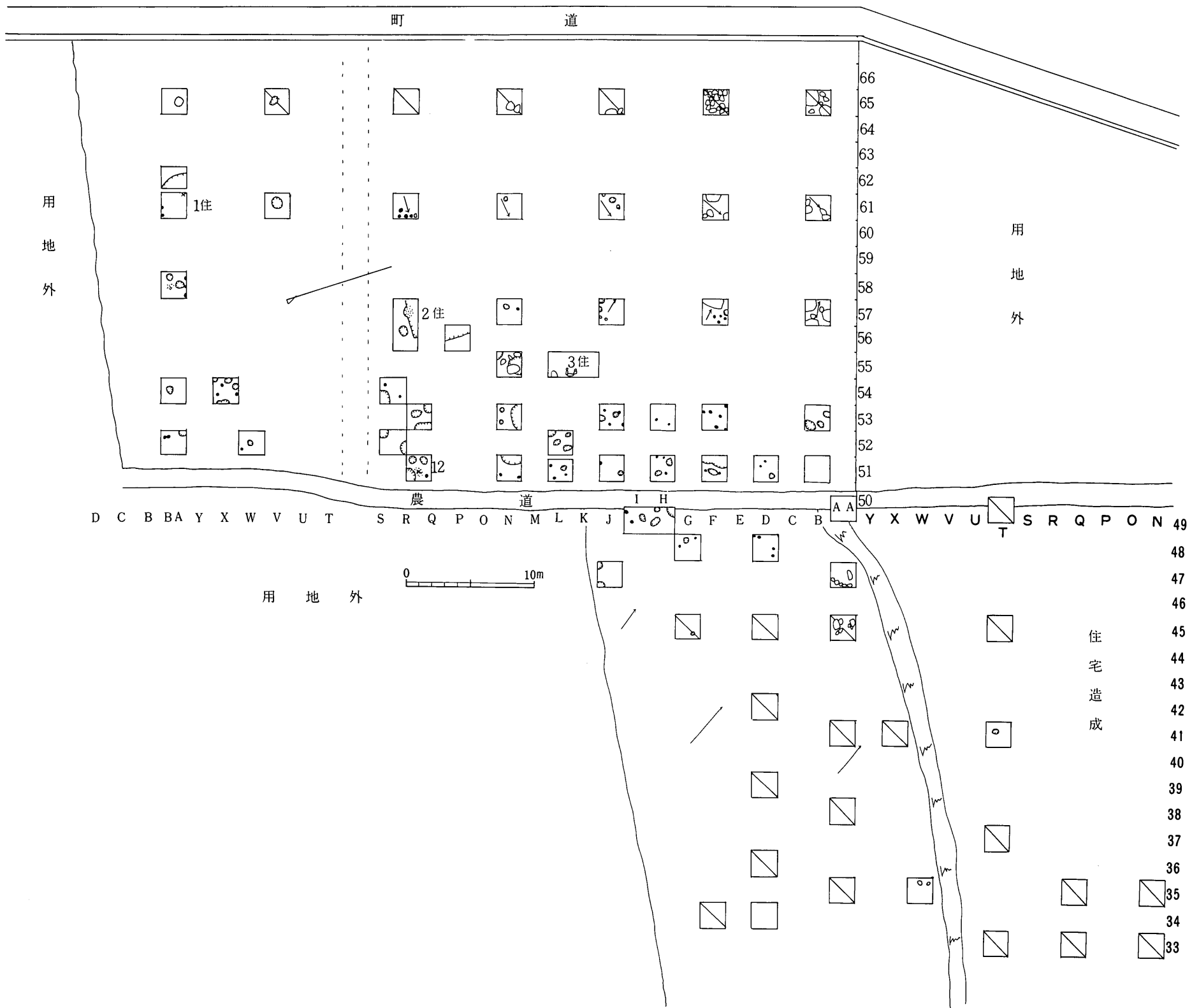
主な遺物

縄文時代中期中葉土器片、縄文時代中期後葉土器片多、縄文時代後期片口形土器1、縄文時代後期土器片多、環形耳飾り片1、小型土器1、土偶1、土製円盤5、打製石器・磨製石器・石鏃・石匙・小型石器多、平安時代甕形・鉢形・坏形土器多、中近世陶器片。

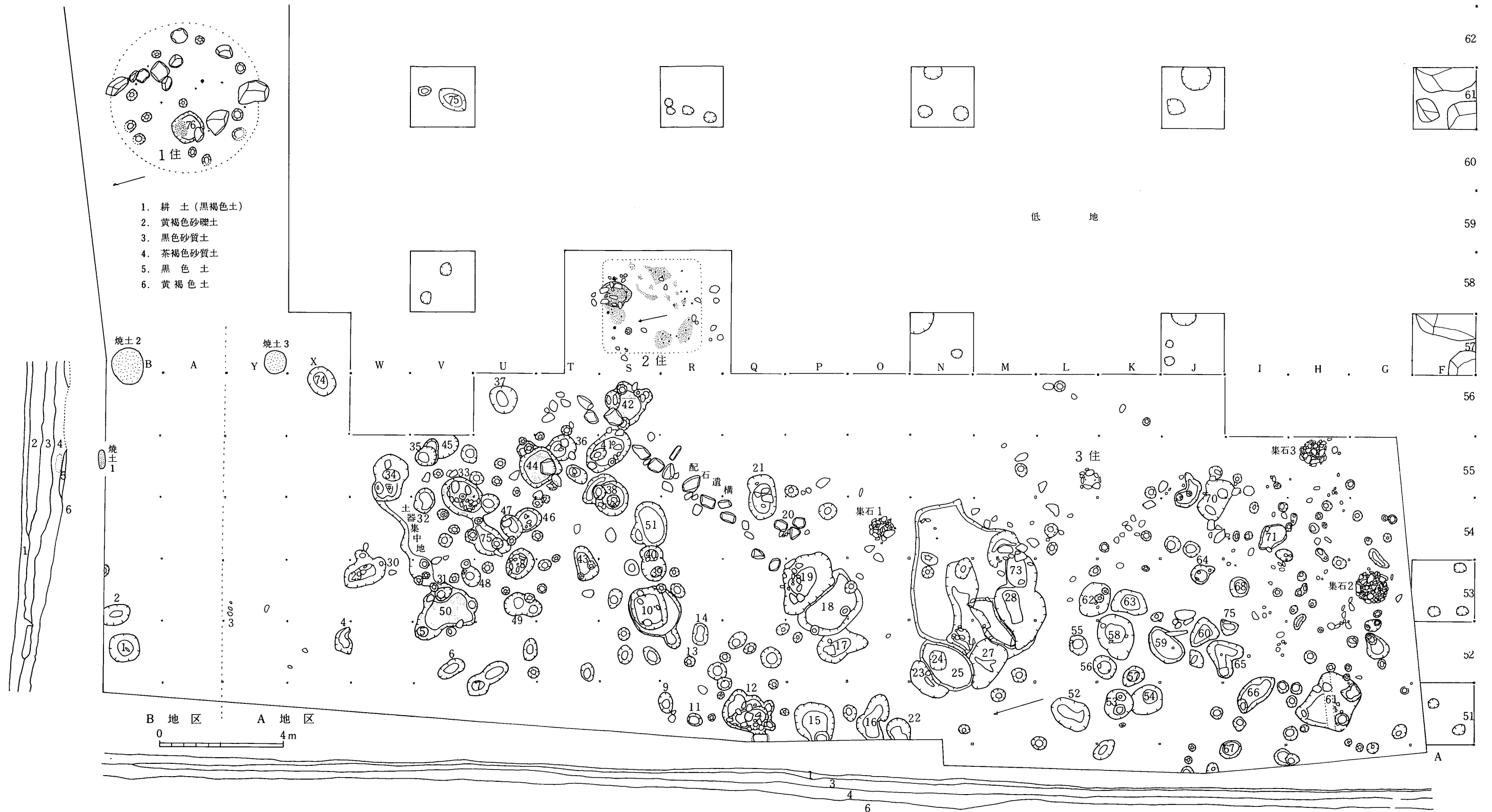
2. 遺構と遺物

(1) 1号住居址

① 遺構(第3・4図、写図3)



第2図 試掘調査グリット図



62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51

第3図 検出遺構全体図

北側上方 A 地区と B 地区にかけて検出された竪穴住居址である。黒色土中に掘り込まれ転石の多い中に構築されているためプランが掴みにくかったが、遺物出土状況・柱穴等の位置から推量するとほぼ 4 m の円形住居址である。主軸方向も炉が土壙と重複していて画然としないが、焼土の位置から西側と思われる EW10°S である。竪穴の掘り方は深めで 30～40cm であるが、床は転石が多くピット・土壙があって凹凸が多い。ピットは 12 個検出され主柱穴ははっきりしないが、1～7 が想定される。P₁₂は浅い窪みで片口形土器が出土している。

炉の位置ははっきりしないが西側の土壙 76 の上面に焼土があったのでその辺りと推定される。石囲いの痕跡はなく地床炉のようである。土壙 76 は出土遺物からみると古い時期のもので、中期中葉であろう。

② 遺物 (第 9・10・23 図、写図 3・12・14)

第 9 図 1 は片口形土器である。口径は楕円状で長径 25・短径 23cm、器高 15.7cm である。口辺は内湾し一方に注口をもち三方に飾り把手が付くがそれぞれ形態を異にしている。内湾する口辺の外側は無文であるが、一辺ごとにコの字形に 18 個の刺突文で囲っている。肩部から底部にかけて細かめの斜状摩り消しの縄文が施されている。第 10 図の土器片は沈線と縄文を配する縄文時代後期堀之内系のものである。図示してないが中期後葉の土器も出土している。

石器は石鏃 2 (23 図 1・2)、剥片石器 3 (23 図 3・6・7)、粗製打石器 3・錘石 3 が出土している。

土壙 76 からは爪形・格子状文の土器片、中期後葉の土器片が出土している。

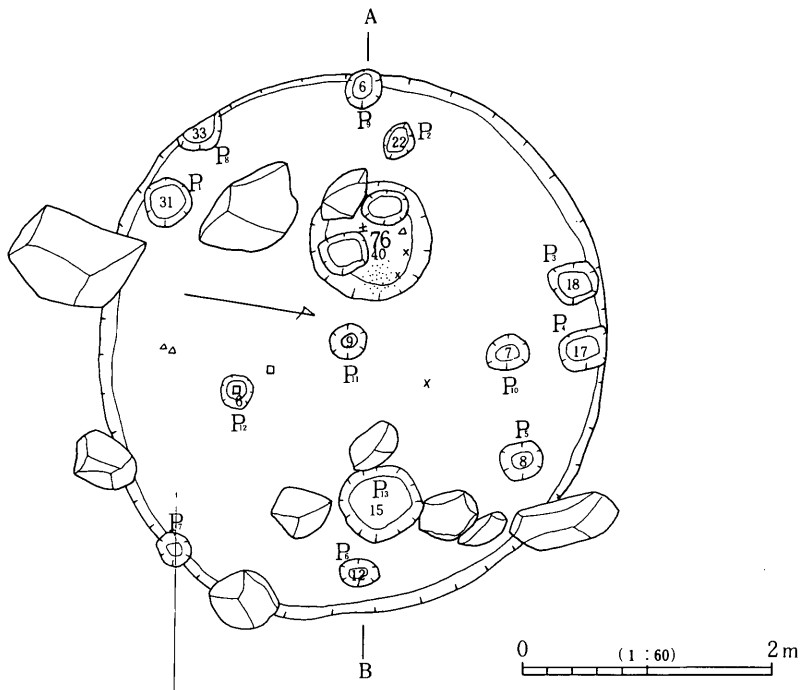
(2) 3 号住居址

① 遺構 (第 3・7 図、写図 5)

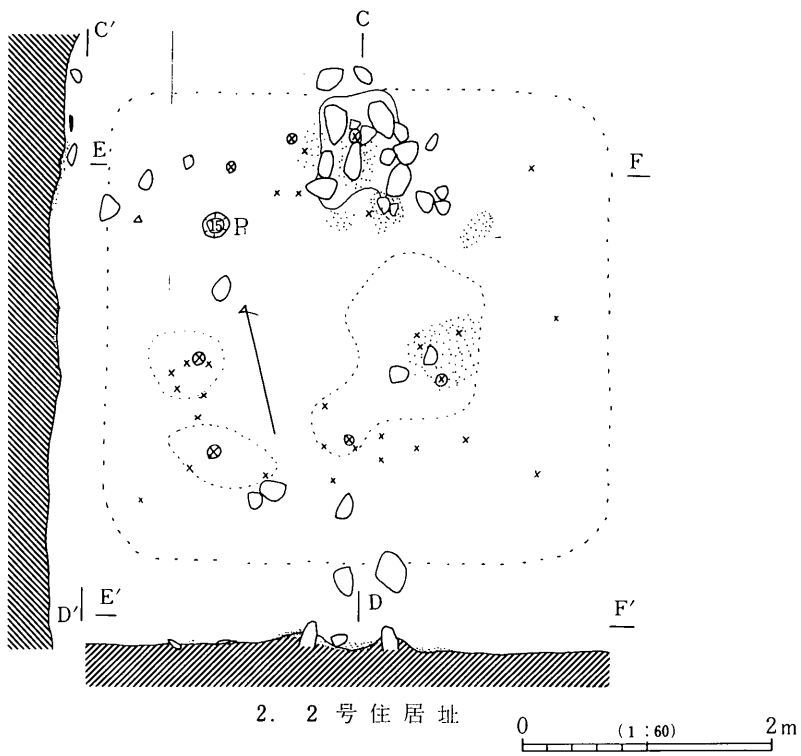
調査地西側下方 R55 で検出された石囲い炉を中心にして周囲のピット 7 個を含めた範囲を 3 号住居址とした。石囲い炉は試掘調査で発見されたが、表土下 60cm で周囲の状況からみて竪穴の掘り込みが無いくらいの位置であった。検出時でも掘り込みは見付かっていない。石囲い炉は南北 70・東西 60cm の長方形で、7 個の石で囲われている。炉内はやく 10cm 下に少量の焼土があり、数片の土器片が出土している。周囲にあるピットは 9 個ほど検出されているが P₁～P₇ は周辺のピットに比べると掘り方が深く、それぞれ深さ 34・36・48・60・26・36cm あることから 3 号住居址にかかわるピットと推定している。床面と思われる固いところもないのははっきりしないが、ピットの位置から推定して 4.5～5 m 位のプランを持つ平地式の住居址かと思われる。

② 遺物 (第 11・23 図、写図 12・14)

出土した遺物は土器片と石器だけである。第 11 図～29 の土器は大部分が沈線と縄文を配したも



1. 1号住居址



2. 2号住居址

第4图 1号住居址·2号住居址

の・摩り消しの縄文のもの・綱代底等、縄文時代後期堀之内系の土器片である。一部中期後葉の土器片もある。石器は粗製の打石器・錘石がある。

(3) 2号住居址

① 遺構 (第3・4図、写図4)

調査地中央東側で検出された住居址である。試掘調査時に表土下70～80cmのところ焼土が検出され、甕形・坏形土器片が出土した。中央部にある低地に掛かるところであるためとくに黒色土の堆積が厚く、石組竈と焼土・黄白色の張り床の一部によって住居址の検出が漸くできた住居址である。竈は住居址の北側壁添いに構築された石芯粘土製のものと思われるが、被せた土と覆土の識別が困難で石だけが露出する結果になった。北側に煙道があったと推定される石2個があり、石の範囲から南北70・東西50～60cmほどの大きさである。竈の前には浅い灰溜めがあり焼土が多く、周囲から破片ではあるが土器の出土が多い。竈の南側一帯には所々に黄白色砂質土の張り床が残り甕形・坏形土器片の出土があったが、住居址の周辺と思われる外郭には床面を識別する土質の変化はなく、壁の落ち込みを見付けることはできなかった。土器片の出土範囲によって推定される住居址のプランは南北3.7・東西4mの方形住居址であろう。柱穴と思われるピットは1個だけしか見付かっていない。

② 遺物 (第12図、写図12)

第12図の土器片は大部分が土師器で極少量の須恵器がある。2～3・8・9は甕形土器、5は焼成良好な口縁内湾の鉢形土器、4～7はロクロ成形痕の顕著な坏形土器で総じて薄手のものである。11～17は甕形・坏形土器底部でへラキリ底が多いが17だけが糸切り底である。18は須恵器坏形土器の底部で糸切りの痕跡が残る。10は灰釉陶器口縁である。灰釉陶器は覆土中では発見されたが床面または床面に近いところでは出土していない。

(4) 土 壙 群

登録した土壙は77基であるが、試掘調査のときに東側でもいくつかの土壙が確認されているからその数はさらに多いと思われる。全域の調査が行なわれていないのではっきりはしないが、中央の低地に東面する西側一帯に75基集中している。A地区XからB地区Bにかけては焼土があったり黒色土中に遺物出土が多かったため茶褐色土までは検出してないので、この下層にも多くの土壙が有るものと推定される。

75基の土壙は千差万別であるが小さめで浅いもの、大きめで浅いもの・50～80cmと深いもの・周囲をピットで取り巻くもの・遺物出土の多いもの・遺物が殆ど出土しないもの等いろいろある。

少量の土器片だけでは時期判断は困難ではあるが、縄文時代中期の遺物だけ出土したものは1・3・6・35・48・61の6基（76・77は別）で、遺物が1片も出土しない土壙は2・4・18・20・23・24・25・30・37・43・45・51・56・67・68・70と16基に及んでいる。後の53基の土壙からは多少の違いはあるが縄文時代後期の土器片が出土している。

縄文時代後期の土器片が10片以上出土した土壙は、7・8・10・12・14・15・19・26・27・28・31・33・38・39・40・41・42・44・46・50・60・63・65・71の24基である。この中で遺物出土が多く回りに深めのピットを持つ土壙は8・10・12・33・42・44・50・61・71であり、遺物出土とくに多い土壙は7・26・28・31・38・40・46・60・65・76である。ピットを持つ土壙・遺物出土の多い土壙・ロームのマウンドをもつ土壙について紹介する。

① ピットを持つ土壙

ア. 土 壙 8（第3・5・13図、写図6）

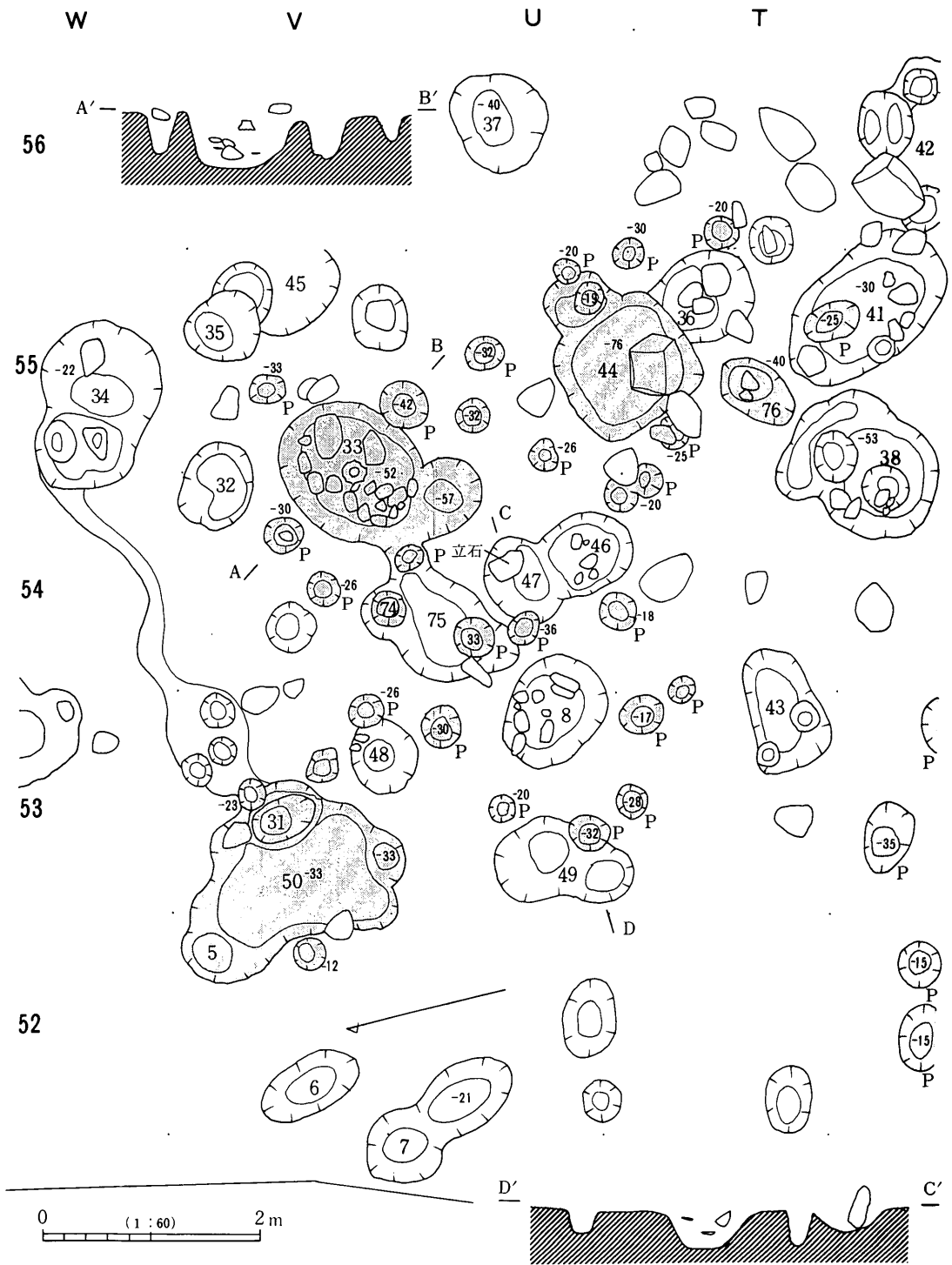
調査地西上方 U53にある土壙で長径105・短径85cm・深さ40cmの摺鉢形で、中間に数個の礫がありその下に縄文時代後期の土器片が10数片・錘石・打石器・黒曜石が出土している。この土壙を取り巻くように8～9個のピットがある。ピットの深さは17～33cmあって整ったものである。出土した土器は破片ばかりであるが第13図の1～19で縄文時代後期堀之内・称名寺系のものが大部分である。

イ. 土 壙 10（第3・6・13図、写図9）

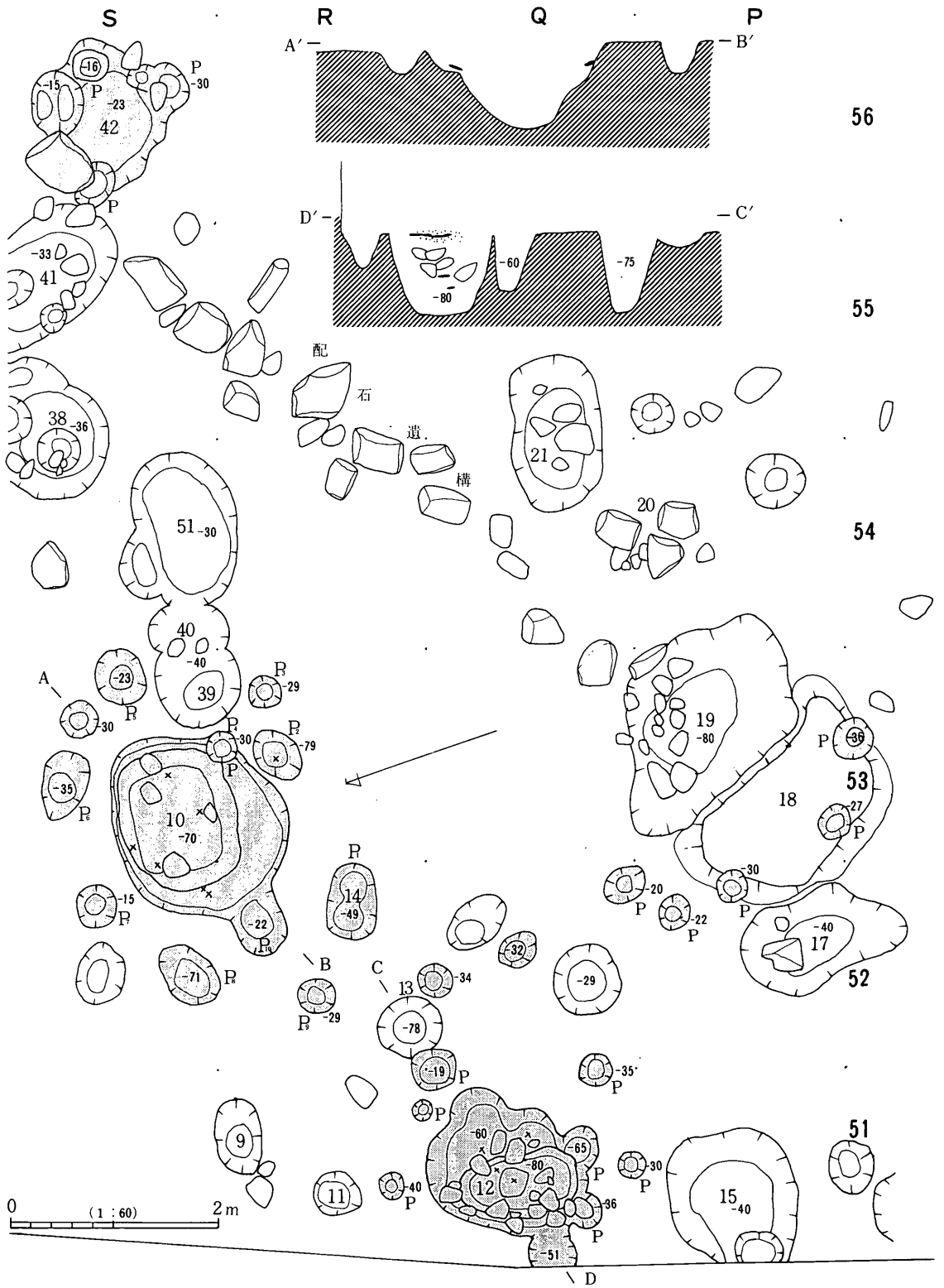
調査地西側中央付近 S・R53にある土壙で外形は1.8m×1.6m、内側は1.4m×1.1mの二重構造の摺鉢形大型の土壙で、深さは70cmほどある。外側の浅めの壁添いに縄文時代後期の半完形の土器が出土したが摩滅が激しく形が残されていない。周囲に10～11個のピットが取り巻いている。ピットの深さは15・22・30・49・79cmとさまざまに2系列あるのかもしれない。出土した土器片も縄文時代中期中葉・後葉、後期のものなどさまざまに土壙の構造と合わせてみると土壙の重複があるものと思われる。南側のピットは79cmととくに深く、底のほうから中期中葉の土器片が出土している。それぞれのピットからの出土品は P₁中期3・後期4、P₂中期1・後期1、P₄後期1・石鏃1、P₅中期2・後期1・スクレーパー1、P₆後期2、P₈中期5・P₁₀中期1・石器片1等である。数多いピットの中で遺物出土の多いものはここだけである。

ウ. 土 壙 12（第3・6・9・13・14図、写図8）

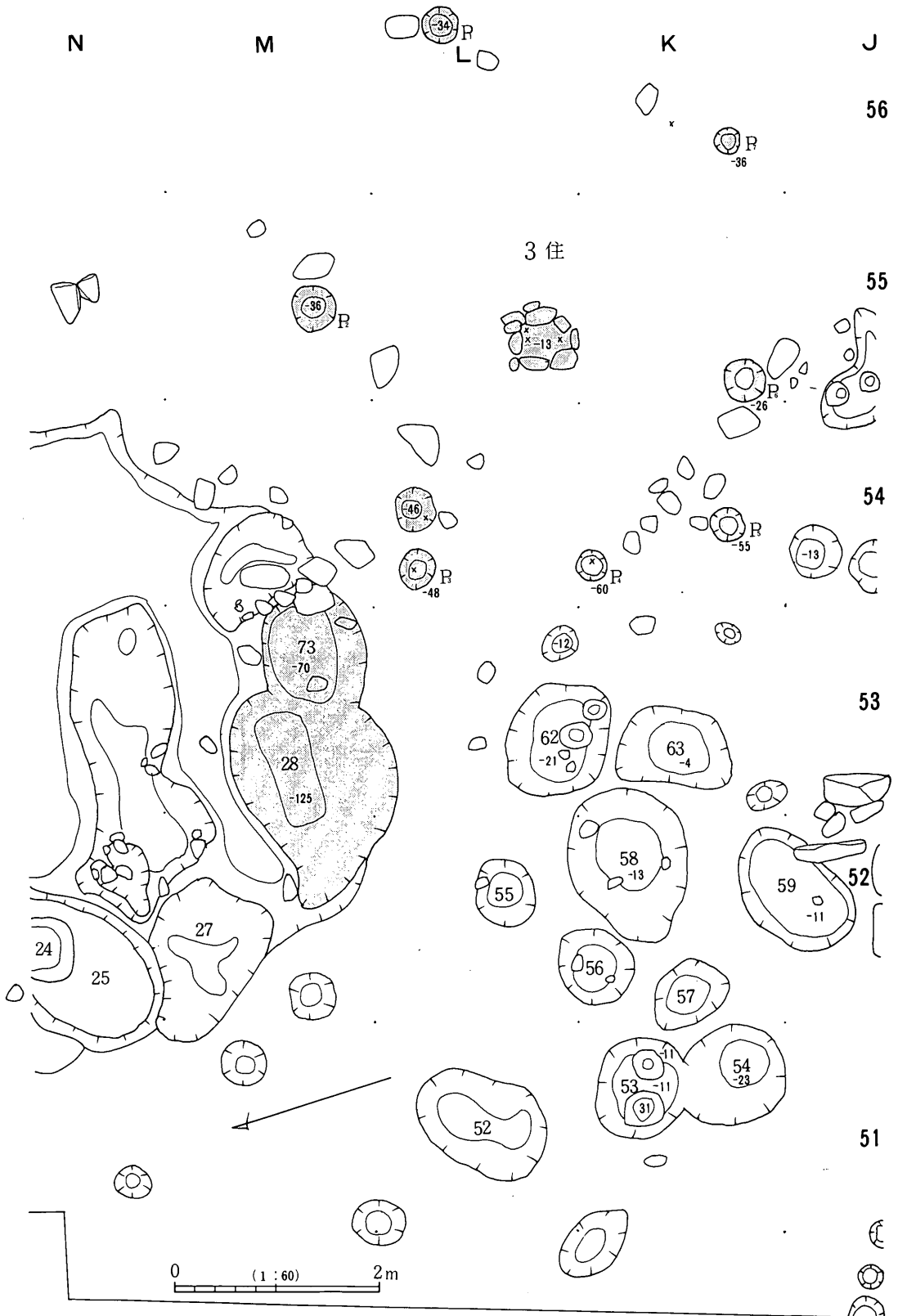
土壙10の西側農道添い Q51にある土壙である。試掘調査のうちに焼土と土器の集中が検出され住居址と登録されたが、検出の結果大きな土壙となったものである。上面は写図8の上のように中央に焼土がありその中に縄文時代深鉢形土器半個体（第9図2）が出土し、その回りに5個のピットが取り巻いていた。土壙を掘り下げると焼土の下層に人頭大の石10数個が重なっている。



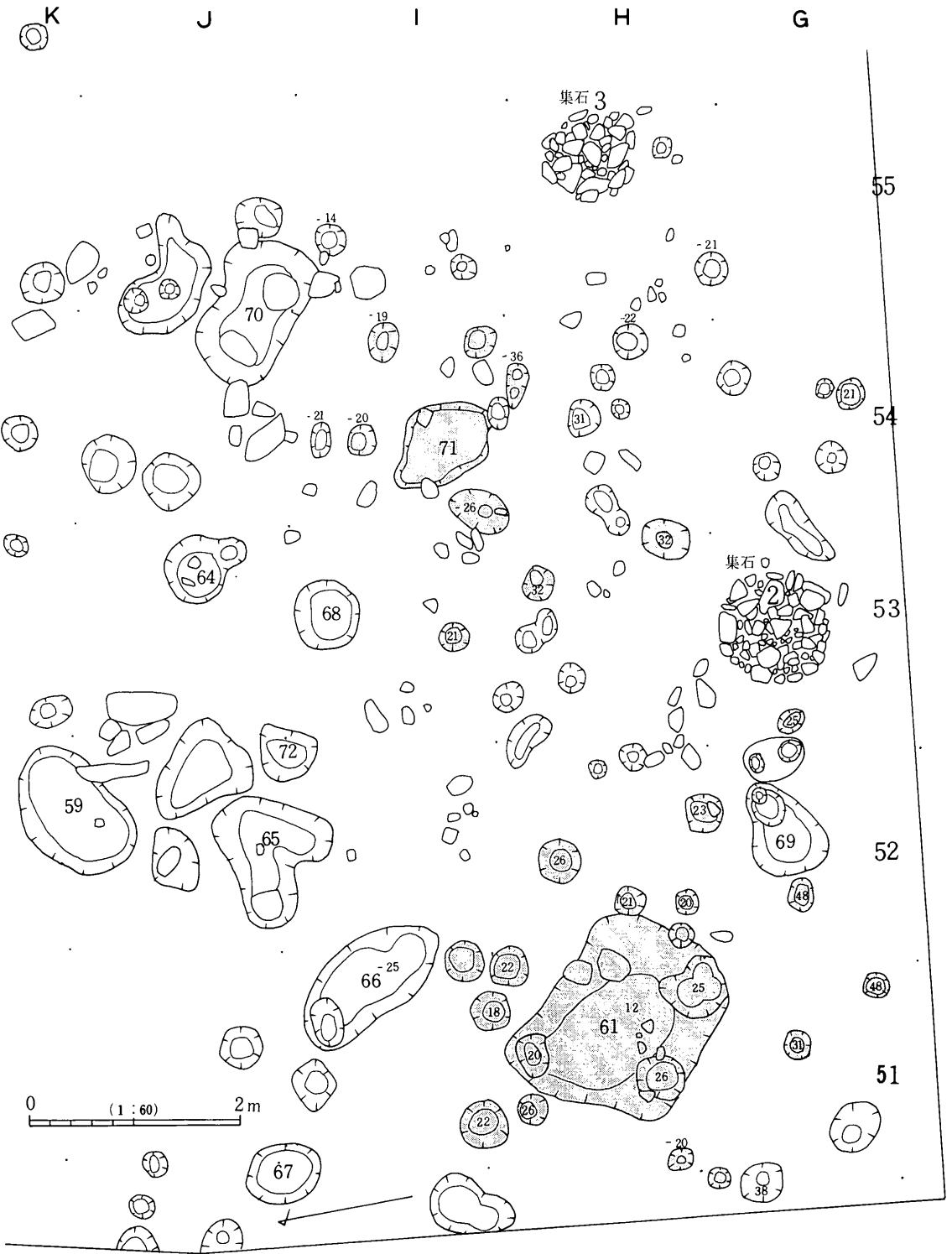
第5图 土壤群 (1) 上方、33·8·44周边



第6図 土壙群 (2) 中央東側、(10・12・配石遺構を中心にして)



第7図 3号住居址と土壙群(3) (下方)



第8図 土壙群 (4) 下方、集石 2・3

て、その間や下層から20片もの土器や打石器4・土製円盤が出土している。土器は第9図2の縄文時代後期称名寺系の土器をはじめ、図13・14のように堀之内系の土器片が多い。中期の土器片も出土してはいるが壙底から後期の土器片が出土している。土壙の回りに4個のピットが並んでいる。掘り下げ前のピットを含めると9個になり、二重に取り巻く形である。農道下は掘れなかったので不詳なことが多いがピットがありそうである。上面・下層が同一土壙のものと仮定すると墓壙的な土壙と推定され、遺体埋葬のあと石を配し土を被せて火を焚いて土器を供えたように思われる。形態的には土壙33に類似している。

エ. 土 壙 33 (第3・5・9・15図、写図7)

調査地西側上方 V54・55にあった土壙でほかの土壙との重複もあるが、長径1.8m・短径1.1m・深さ55cmほどの円筒形状のものである。上面に縄文時代後期の土器底部(第9図3)が逆位で出土し、その下層に累石状の石が20個ほど重なりその間から縄文時代中期・後期の土器片、打石器・黒曜石が出土している。土壙の回りには不規則な配置ではあるがピットが6～7個並んでいる。ピットの深さは19・25・32・42cmさまざまである。出土遺物は第9図3の粗製大型甕形土器の底部、第15図1～16・31～41で中期の土器片も含まれているが、無文へら削りの粗製大型土器片・太い沈線と縄文で構成される堀之内系の土器片が大部分である。他の土壙との重複があるので周囲のピットが同一のものかとははっきりしないが、位置的にみて繋るものと思われ形態的には土壙12に類似している。

オ. 土 壙 44 (第3・5・15図、写図9)

土壙33の東 U55にある土壙で上面は1.2m×1.0mの長方形をなし深さ76cmの筒形である。上部に大石があったほかは石は殆ど無く、土器片は縄文時代中期中葉爪形・竹管文土器4・後期鉢形土器片ほか20片が出土している。他の土壙との重複があるので全部結び付くかどうか不詳ではあるが、周囲に8個ほどのピットが取り巻いている。土壙の深さに比較すると浅めで20～30cmほどである。第15図17～33のなかには少量中期の土器片はあるが、多くは縄文時代後期堀之内系の土器片で土製円盤も含まれている。

カ. 土 壙 61 (第3・8・16図、写図7)

調査地西側下方 H51にある土壙で長径1.8m×1.5m・深さ12cmほどのものである。壙内と周囲に12～13個のピットがある。ピットの深さは18～26cm・南側でも30cm程度である。試掘調査でこの辺の一部が掘り下げられ、検出調査でも黒色土が削られたこともあるので土壙やピットは上層から構築されているように思われる。土壙が浅いわりには大型土器片の出土は多く上面からの出土が多い。縄文時代中期の土器の片も多いが後期の土器片は40点ほど出土している。第16図11～29の中には中期の土器もあるが大型のものは後期である。

キ. 土 壙 71 (第3・7・16図、写図7)

調査地下方 H54にありやく80cm方形・高さ10cmほど盛られたロームマウンドで、その回りに深さ20～30cmのピットが5～6個取り巻いている。土壙とは形態が違うがピットの取り巻きがあるので類似のものとして取り上げた。周辺からは第16図24～29の土器片が出土している。

ク. 土 壙 42・50 (第3・5・6図)

調査地西側上方土壙8・33・44の両側にある。土壙42は東南に位置し土壙50は西北にある。周囲にピットを持たないで土壙内にいくつかのピットを持つタイプである。

ピットを持つ土壙のなかで土壙の形態・土器の出土量・ピットの並び方からみて特徴的なものは土壙8・10・12・33・44・61である。このなかで61を除いては西側上方Q～V列にかけて地形傾斜に添って東西やや北に触れて直線的に並ぶ。これらの土壙群の東南にほぼ方向を同じくしてやく3.5mほどに並ぶ平状石の配列がある。この配石遺構とピットを持つ土壙群が同一構築のものかどうかは検証の資料はないが、配石遺構の周辺にはピットが検出されないこと・ピットがあるのはこれらの土壙の周辺であることからただ偶然の位置にあるとは思われない。

ピット状遺構が集中するところは下方地域にもある。土壙と結び付くものは61・71だけであるが、黒色土層が厚くピットを検出したときには上層の集石遺構・石群との高低差30cmほどになったことから、構築面は上層にあるとするならば下方一帯にもピットを伴う遺構群が有ったものと推定される。

② 特長のある土壙

ア. 土 壙 19 (第3・6図、写図10)

配石遺構の東南端 P53にある土壙で長径2.3m・短径1.5m、深さ80cmの摺鉢状の大型なものである。中層には人頭大の石が10数个埋められ、その間や下層に縄文時代中期・後期の土器片が出土している。土壙の南側に接して高さ30cmほどの台形状のロームマウンドがある。このロームマウンドを穿つように3個のピットが並び、北側のピット2個と合わせて5個のピットが土壙19の西南を取り巻いている。土壙19は配石遺構の西側端に構築されたような位置にありロームマウンドは掘りあげた土が盛られたところかと思われる。

イ. 土 壙 24・25・27・28・73 (第3・7・17図、写図7)

西側中央部に広い範囲に掘り込まれいくつもの土壙が重複しているところがある。このなかにもロームマウンド(25)があり27・28・73からは多くの遺物が出土している。とくに土壙28は125cmと深く縄文時代中期・後期の土器片が40片以上(第17図37～42)出土している。

③ 土器片出土の多い土壙

個々については説明を省略するが土壙7（19図）・26（17図）・28（17図）・31（17図）・50（17図）・59（18図）・60（18図）・63（18図）・65（18図）からは縄文時代中期の土器片も出土しているがどの土壙からも縄文時代後期の土器片が出土している。

(5) 集石遺構

① 集石遺構1（第3図、写図7）

調査地西側中央部 O54にあった集石である。径1.3mほどの範囲に人頭大から拳大の石を円形に集めたもので、集石の厚さはやく20cmほど有った。

② 集石遺構2・3（第3・8図、写図11）

調査地西側下方の2は G53にあって径1.1mの円形、3は H55にあって径90cmほどの楕円形状の集石である。ともに人頭大の石の間に拳大以下の石がぎっしり詰められている。石の間に縄文時代後期の土器片・石器が少量有っただけで時期判定をするほどの遺物はない。構築された土層は黒色土中であり集石の下にも黒色土があったこと、周辺から縄文時代後期の土器片・小型土器（第9図4）等が出土していること、集石の下層で多くのピットが検出されていることから縄文時代後期の遺構かと推定される。

(6) 焼土群と土器集中地

B地区B55・B56・A地区Y57にそれぞれ焼土が検出されている。焼土1は北側用地境の土層断面で検出されたもので表土下1.1m茶褐色土上部にあった。検出された土器は第18図19の1片だけで今回の調査による唯一の縄文時代晩期系の土器片である。

焼土2・3は1の南にあって表土下1.2～1.3mと深いために一部しか検出されていない。この一帯は中央の低地に掛かる東面傾斜地のため黒色土が深く、下層の茶褐色土中に土壙74があった。

土器集中地と名付けた所は西側上方 V 列である。土壙50と土壙33の間一帯で縄文時代中期・後期の大型土器片が出土している。全体的に浅い掘り込みがあったが遺構の検出はできなかった。第18図22～36の土器がそれで縄文時代後期もあるが多くは中期後葉の土器である。

(7) その他の遺物

縄文時代中期中葉・後葉の土器も多く出土している。その出土範囲は全域に及ぶがグリット毎に整理してみると、中期中葉の土器は西側上方に多く中期後葉の土器は調査地西側上方と下方に

多く、試掘調査によるグリットでは東側上方に多いところがあった。

第11図40～51、20図1・2・4は爪形文・竹管文の施された梨久保式系のもので、それに類するものは第22図29～44である。中期後葉のものは第22図1～27で諏訪地方型式の曾利III～IVに当たるものが多い。

縄文時代後期の土器が総体の70%を占めているがその代表的なものを第20・21図にまとめてある。主体となるものは太めの沈線による並行・区画文と摩り消しの縄文を配したもので、20図28のように粗製厚手の土器に沈線で文様構成したもの、8の極単純な細い沈線文様の称名寺系タイプ・26のような粗製厚手の土器に斜状搔文の付いたもの・無文の土器等がある。

小型土製品は小型土器（I53）・土偶足（F53）・環状耳飾り（I53）・土製円盤5（土壙44・66・7ほか）が出土している。数少ない土製円盤のなかで3個が土壙から出土していることに注目したい。

住居址等が少なかったためか小型石器類は少ないが黒曜石・剥片の数は多い。第23図の石器は石鏃・尖頭器・スクレーパー・石匙・石核・剥片石器・小型磨製石斧等である。石鏃の形態もさまざまな平根形・曾根形・有舌・三角形・えぐりの多いもの・変形形等である。

打製・磨製石器の数は多い。遺構出土のものはそれぞれ第10・11・24に載せ、その他のものは25～28図に載せてある。このなかには縄文時代中期・後期のものが混在しているが厚さ・形態変化は見当たらない。しいて言えば土壙出土の石器は成形が粗雑で剥離面調整の少ないものが目立つ。特殊なものでは土壙73出土の楕円自然石（第24図22～24）と土壙28出土の超大型打石器（第24図8）である。大小さまざまな錘石の数も多い。出土石器の大部分を載せてあることもあるが、33個出土している。

IV 調査のまとめ

1. 縄文時代後期の土壌

縄文時代後期の遺物は各所から発見されてはいるが、遺物多出土・遺構の検出となると少なくなる。縄文時代後期・晩期の時期はその年代が短いこともあるが、生活する場所が台地上は少なく川に面する傾斜地や低地にあることが多いので発掘調査例が少ないためかと思われる。日影林遺跡は縄文時代後期の遺物は出土はしていたが中期中葉・後葉の主要遺跡として注目されていた所で、今回の発掘調査によって後期の遺物出土が多くその出土範囲が広範に亙ることに特色がある。しかも住居址が2基・特長のある土壌群が検出されたことは現在のところでは飯田・下伊那地方でも数少ない主要遺跡に仲間入りする状況である。

今回の発掘調査で検出された77の土壌の内縄文時代後期に比定される土壌の数ははっきりしないが、確実に後期と思われるものは少なくとも30基以上はある。このなかで報告でも触れたようにピットを持つ土壌のグループに注目したい。その土壌は土壌8・12・33・42・44・50・61・71の7基で61・71を除いては調査地西側の上方に直線的に並ぶ。その並ぶ方向はNS30°Wで台地中央に南北方向に走る低地に面する自然地形に添っている。他の土壌とも重複しているので画然とは言い難いが東南に並ぶ配石遺構ともほぼ同方向であることに注目したい。

最も特徴的な土壌12は表土下60cm茶褐色土層上面に焼土が発見され、焼土に密着した口縁が波状で粗雑な沈線と摩り消しの縄文でわずかに施文された甕形土器半個体が出土した。焼土の回りは大きな土壌のようで黒色土が目立ちその外縁を5個のピットが取り巻いていた。土壌の半分を掘り下げると壙内中央に人頭大の石が配されその間や下層から多くの縄文時代後期の土器片が出土している。土壌の深さは80cmに及び幅もピットにまで及び、覆土中にも少量の焼土があり壙底からも縄文時代後期の大型口縁が出土しているので、土壌の時期は縄文時代後期・形態からみると墓壙ではなかろうかと推測される。さらにその外側に大きく取り巻くようにピットが穿たれていた。

土壌12の北東側に土壌10・44が続き、南東に土壌42が・北西に土壌33・50が位置し形態・遺物の出土状況との差異はあるがピットを伴う土壌の集団があるように思われる。下方には同形態のものに土壌61・71があるだけだが、集石遺構があったりピット群が有ること・縄文時代後期の土器片出土が多いこと・今回検出調査が出来なかった下方地域にもピットが存在することから同様の土壌群が広範囲にあると考えられる。

飯田・下伊那郡内では土壌群の検出例は多いが、住居址等の検出が先行して土壌群そのものの詳細検出例は少ない。昭和63年10月阿南町早稲田遺跡で縄文時代中期・晩期、弥生時代中期・後

期の土壌が100基ほど検出された。焼土やピットを伴う例もあり低地に面する傾斜地に構築される立地条件・重複される各期の土壌の形態等似通ったものがある。その意味からすれば一つ大きな話題を提供した発掘調査の結果といえよう。

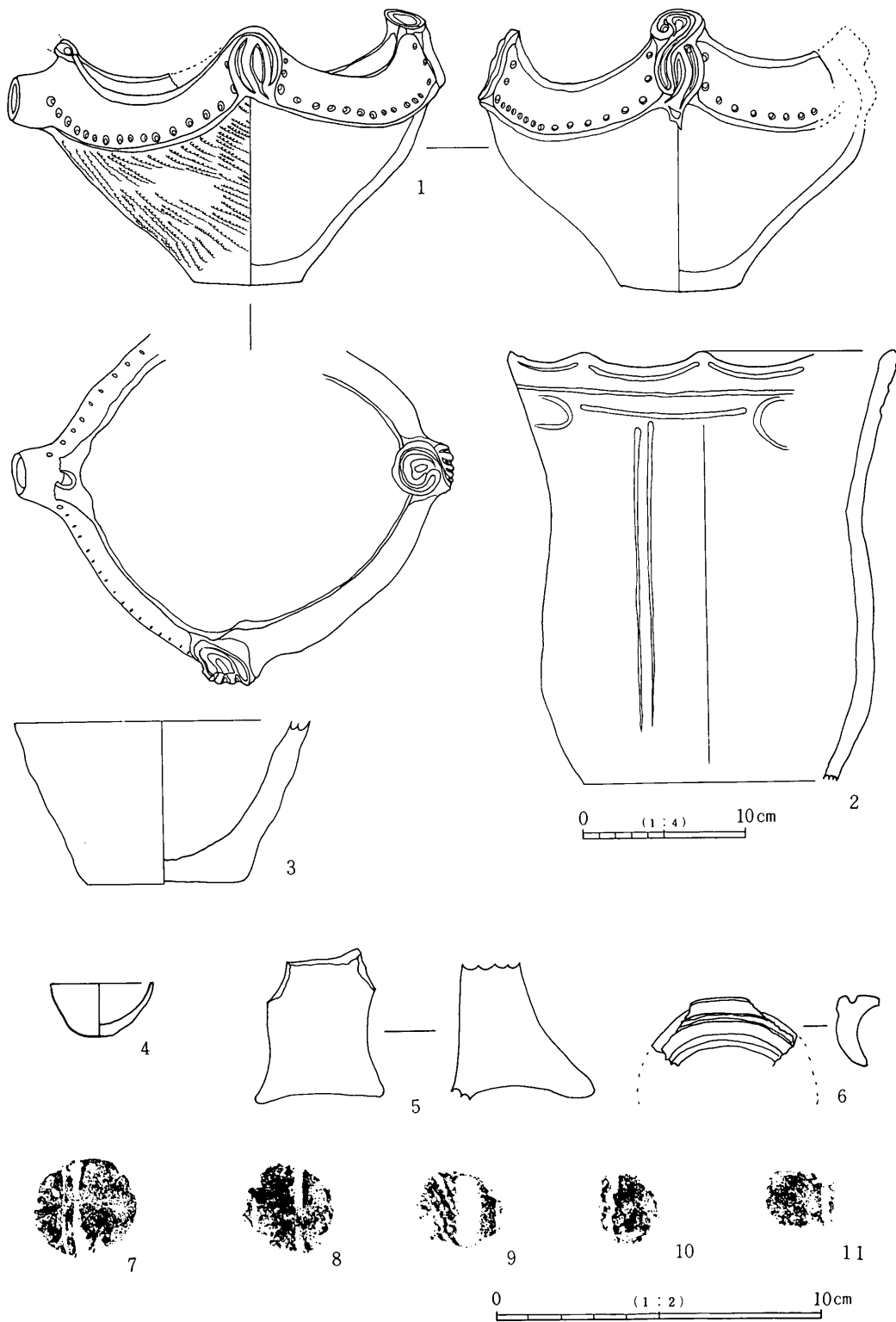
2. 日影林遺跡発掘調査の意義

整理報告書を刊行する段階になってみると発掘調査方法の不備、用地事情・調査日程上の都合・遺物包含層の深さ等により全面的な検出調査ができなかったことが悔まれてならない。とくに調査地中央付近に有ると推定される低地の正体・この低地に面する傾斜面に立地する各時代の生活遺構・墓域に関わる諸遺構の有り方等未解明に終わったことは多々ある。其の後に調査した阿南町早稲田遺跡の低地に立地する土壌群の検出調査をしてみて、見透しの甘かったことをつくづく反省させられた。しかしながら民間経営の木下工務店の深いご理解と御協力によって、宅地造成計画を延期してまで試掘調査・検出調査を遂行させていただけただけでも幸いと思っている。総合的な結果の不備はあっても、それなりに大きな成果を上げることができたと深く感謝している。

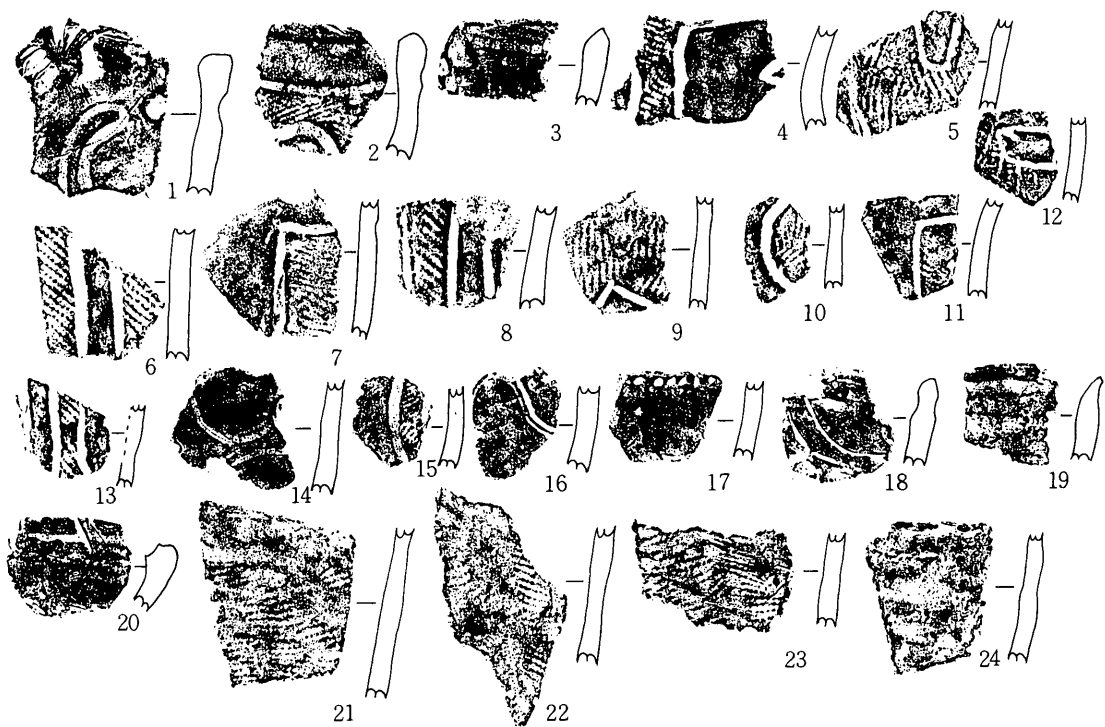
前項で触れた縄文時代後期の土壌群の検出も大きな成果の一つであり、日影林遺跡は縄文時代中期・平安時代の遺物包含地として登録されていたがそれ以上に各時代の遺物・遺構が重複し、それぞれが所を変えて生活地を構成したと思われる状況の一部が掴めたことに大きな意義がある。試掘調査・折々の表採調査によるとこの地域全域に濃密な遺物包含があるとは思えない。全域に互る調査ではないが西側上方を走る町道際は傾斜も強く遺物出土は少ない。東側を走る町道沿いはわずかで野底川に接する最低地に掛かる急崖で有りながら、その先端近くから縄文時代中期の完形土器が出土した例もある。また上方二つの町道が合流する辺りの台地端では相当量の縄文時代中期・後期の土器片や黒曜石が表採出来るところがある。

調査地内に限ってみたときに当初予想された縄文時代中期中葉の土器は上方に多いこと、中期後葉の遺物は全域に互って出土はしているが出土量の多い所は上方と下方に夫々二箇所あること、縄文時代後期の遺物は全域に互って出土するが地形的にみたときに土壌群より低い位置に住居址があること、平安時代の住居址は1軒だけ検出したが遺物の出土場所はほかにもあるので、小集落の存在が推定できる等示唆されるが多々あった。この一つ一つを解明することは容易ではないが、野底川の浸食作用によって平林・日影林地籍が大きく変容しているであろうことも念頭に入れながら、川に面する遺跡の有り方・一連の台地かと思うなかにも傾斜地もあり低地もあること・低地そのものが古い時代の生活立地上重要な要素になることもありうるなどいろいろ教えられた発掘調査であったことにも大きな意義がある。

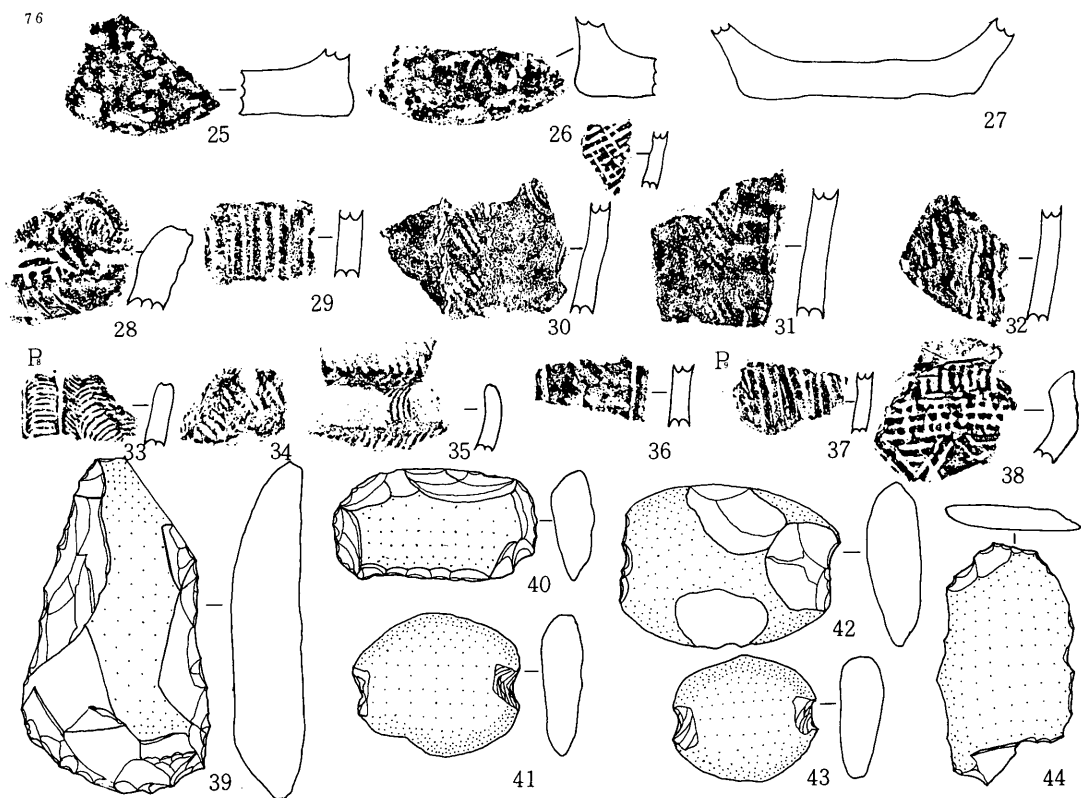
報告書原稿執筆終了に当たり木下工務店・上郷町教育委員会の方々、協力作業員の方々のお力添えに御礼を申し上げます。



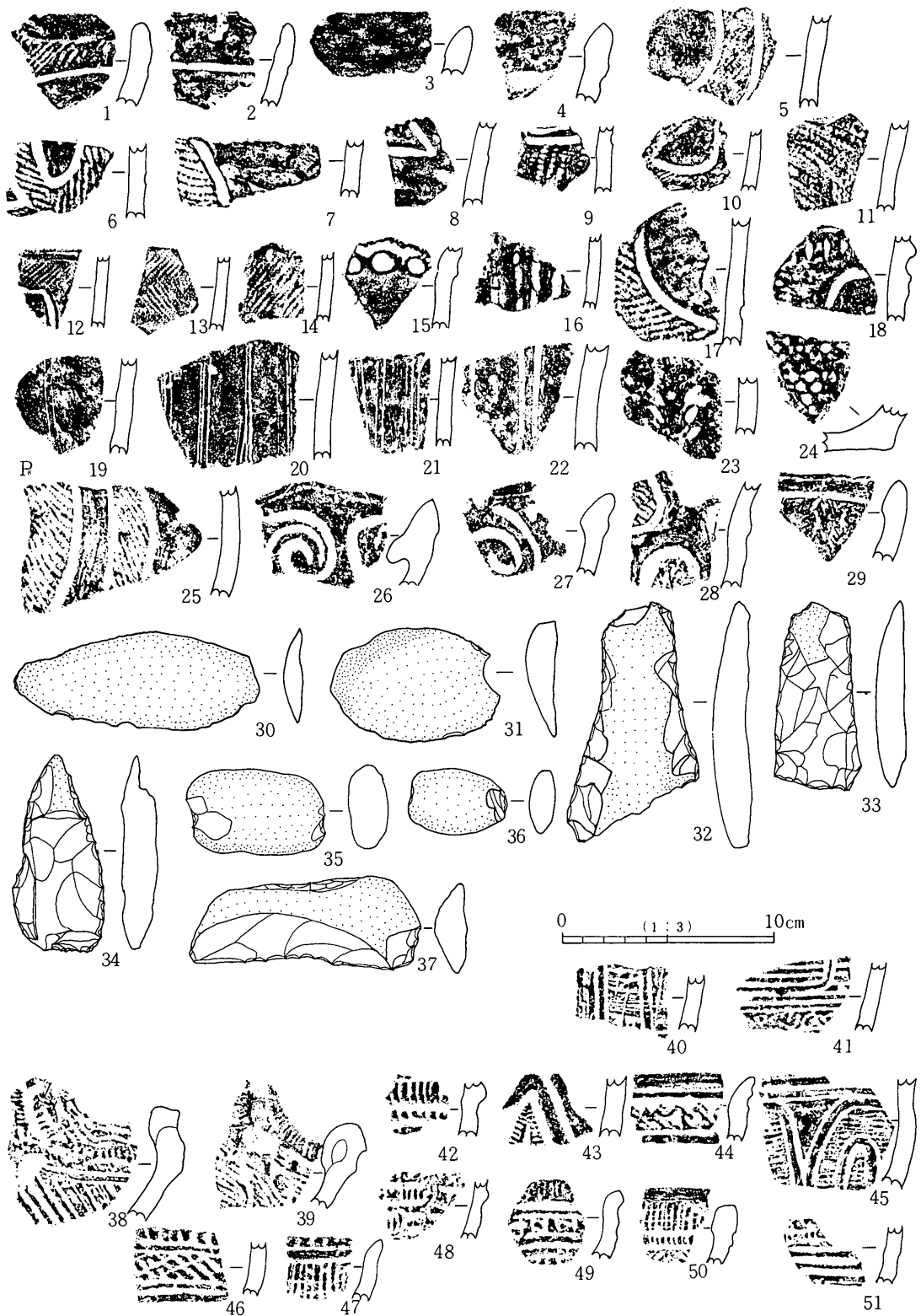
第9図 1号住居址・土壙12・33出土土器、グリット出土土製品



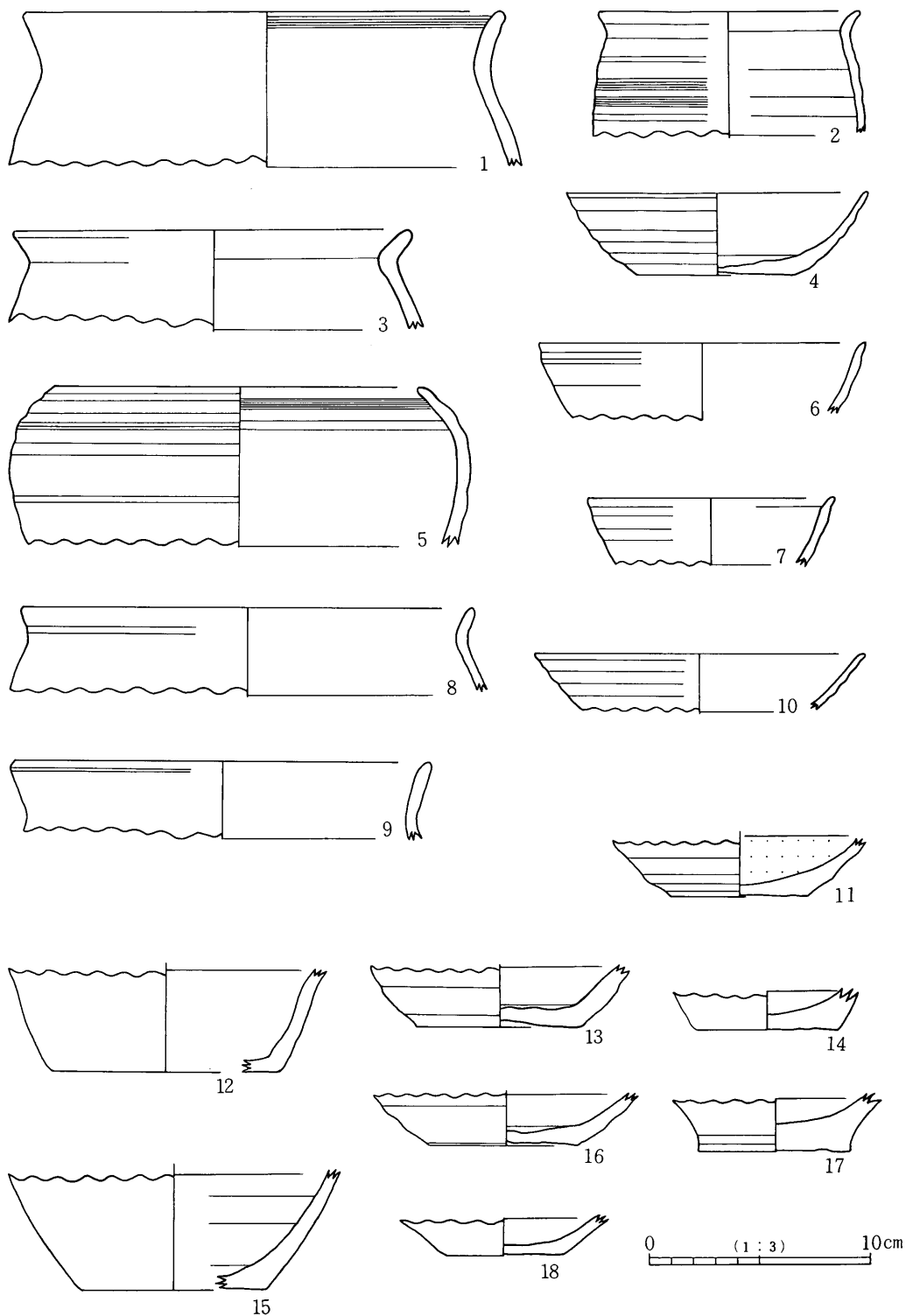
0 (1:3) 10cm



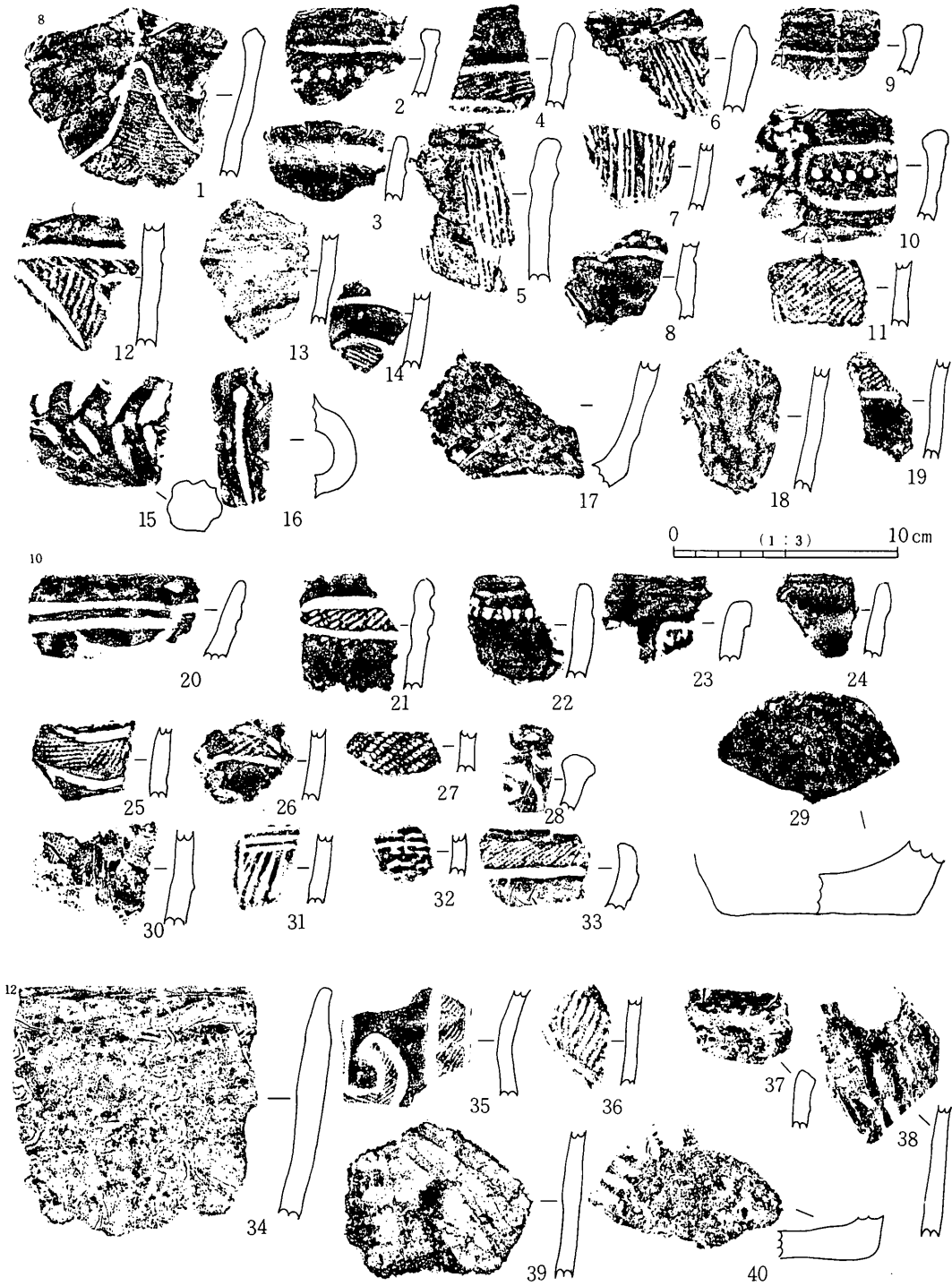
第10图 1号住居址·土壙76出土土器拓影·1号住居址出土石器



第11図 3号住居址出土土器拓影・出土石器、グリット出土中期中葉土器拓影



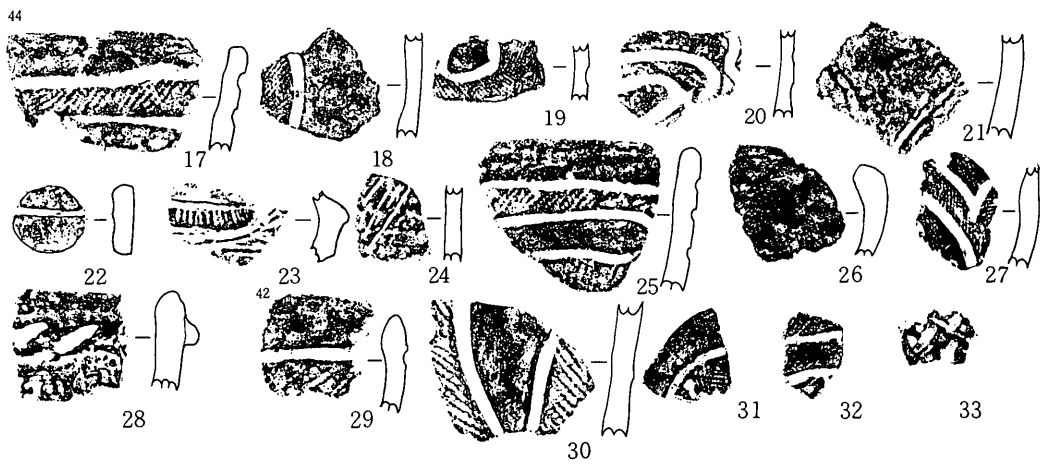
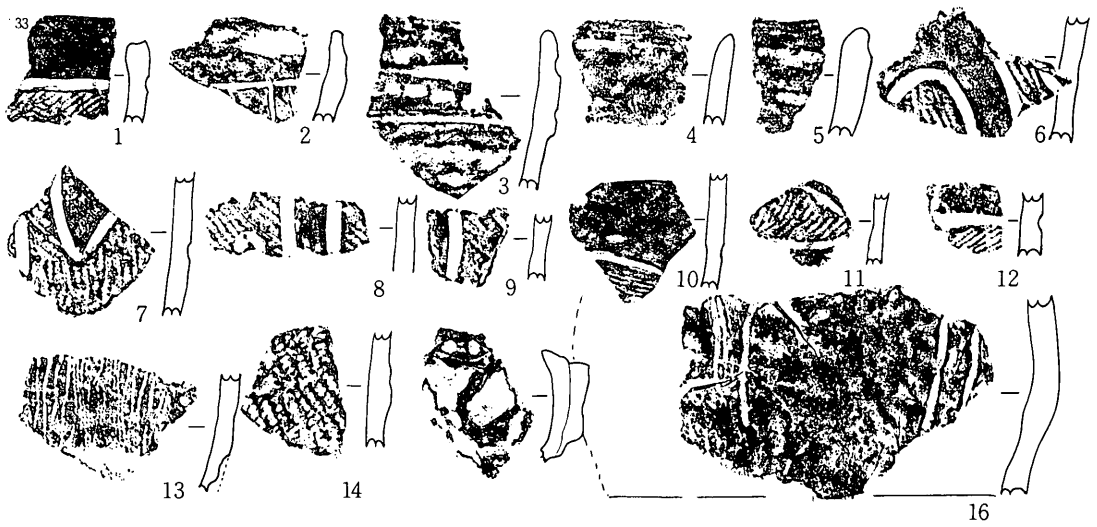
第12图 2号住居址出土土器



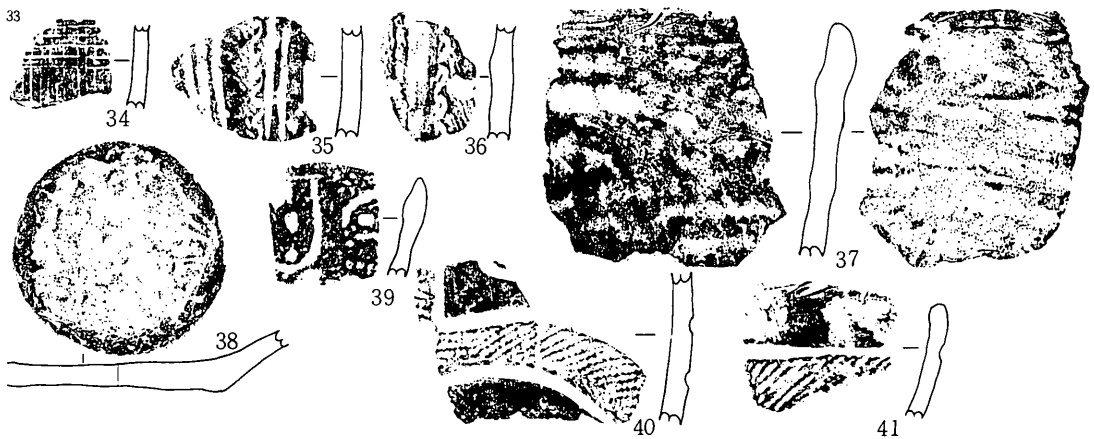
第13図 ピットを持つ土壙 8・10・12出土土器拓影



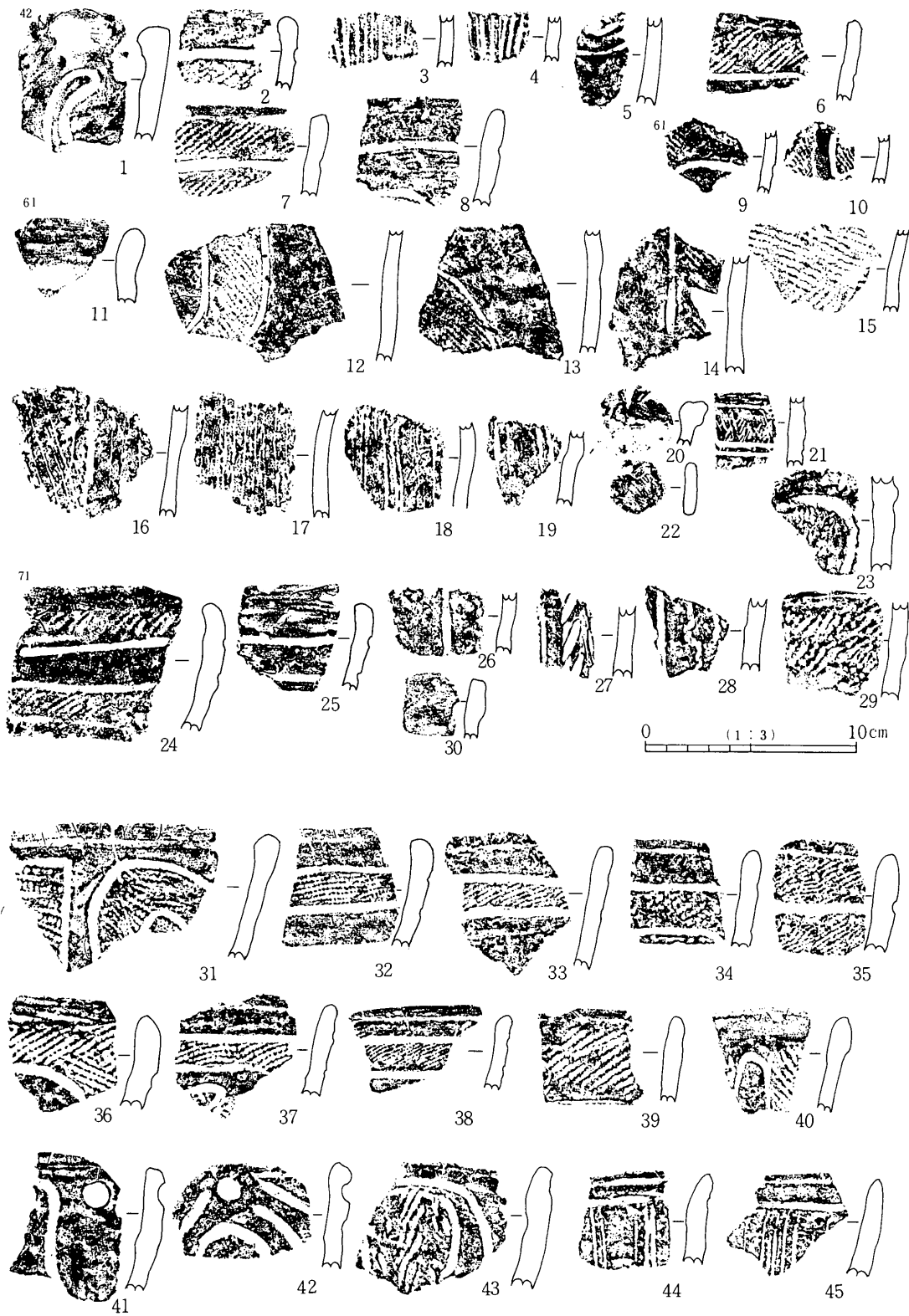
第14図 ピットを持つ土壙12出土土器拓影



0 (1:3) 10 cm



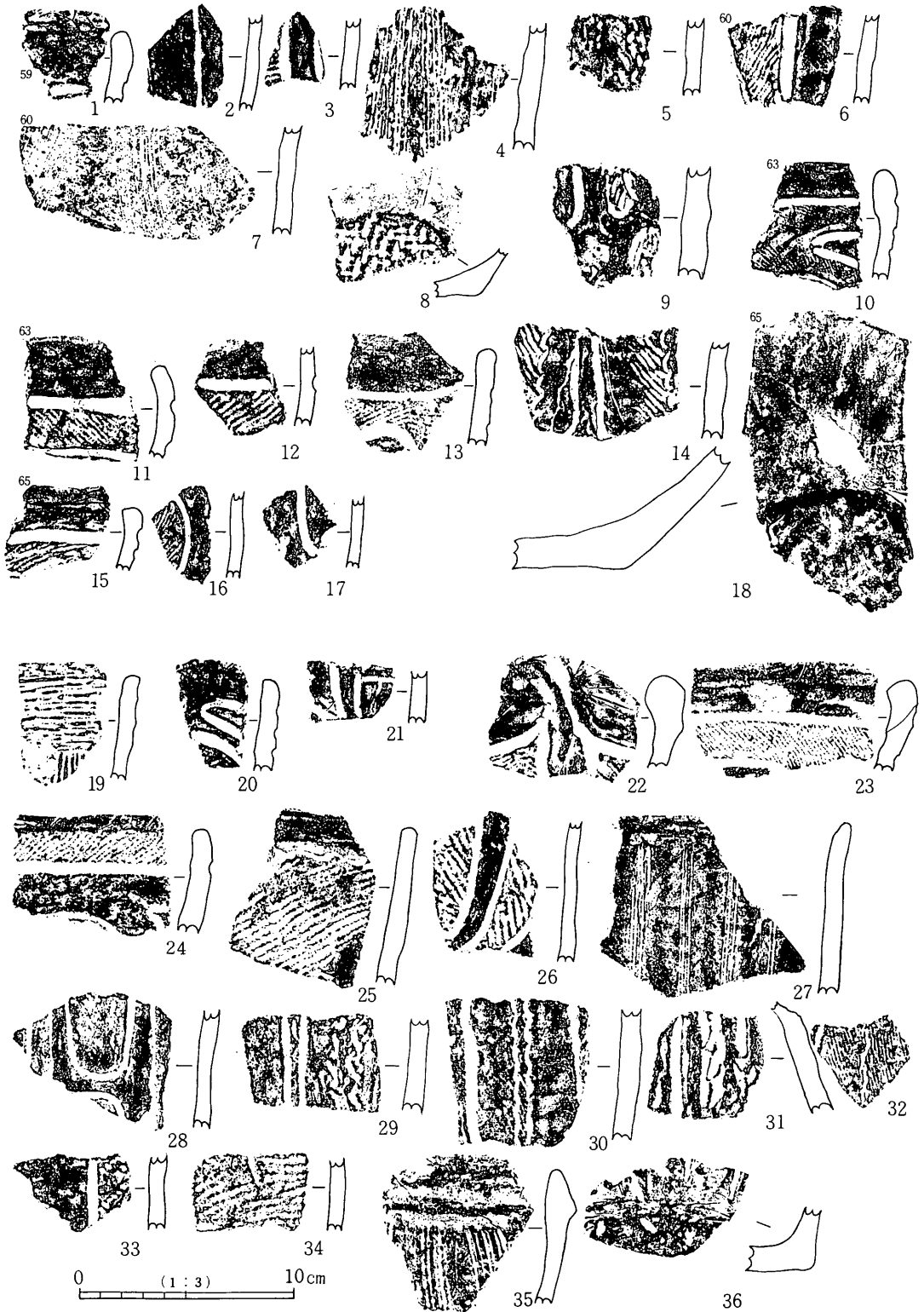
第15図 ピットを持つ土壙33・42・44出土土器拓影 (小番号 土壙番号)



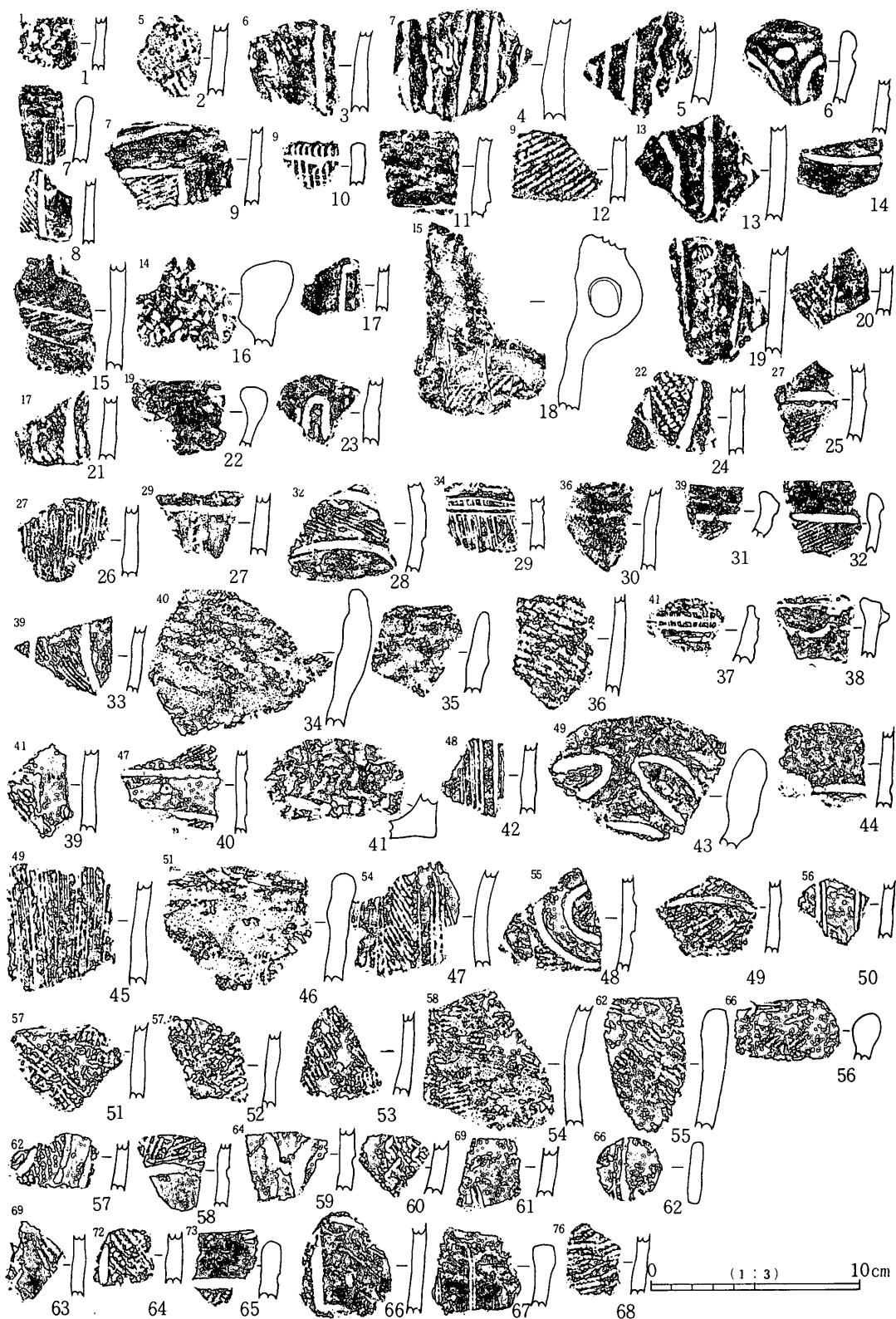
第16図 ピットを持つ土壙42・61・71、周辺出土縄文後期土器拓影（小番号 土壙番号）



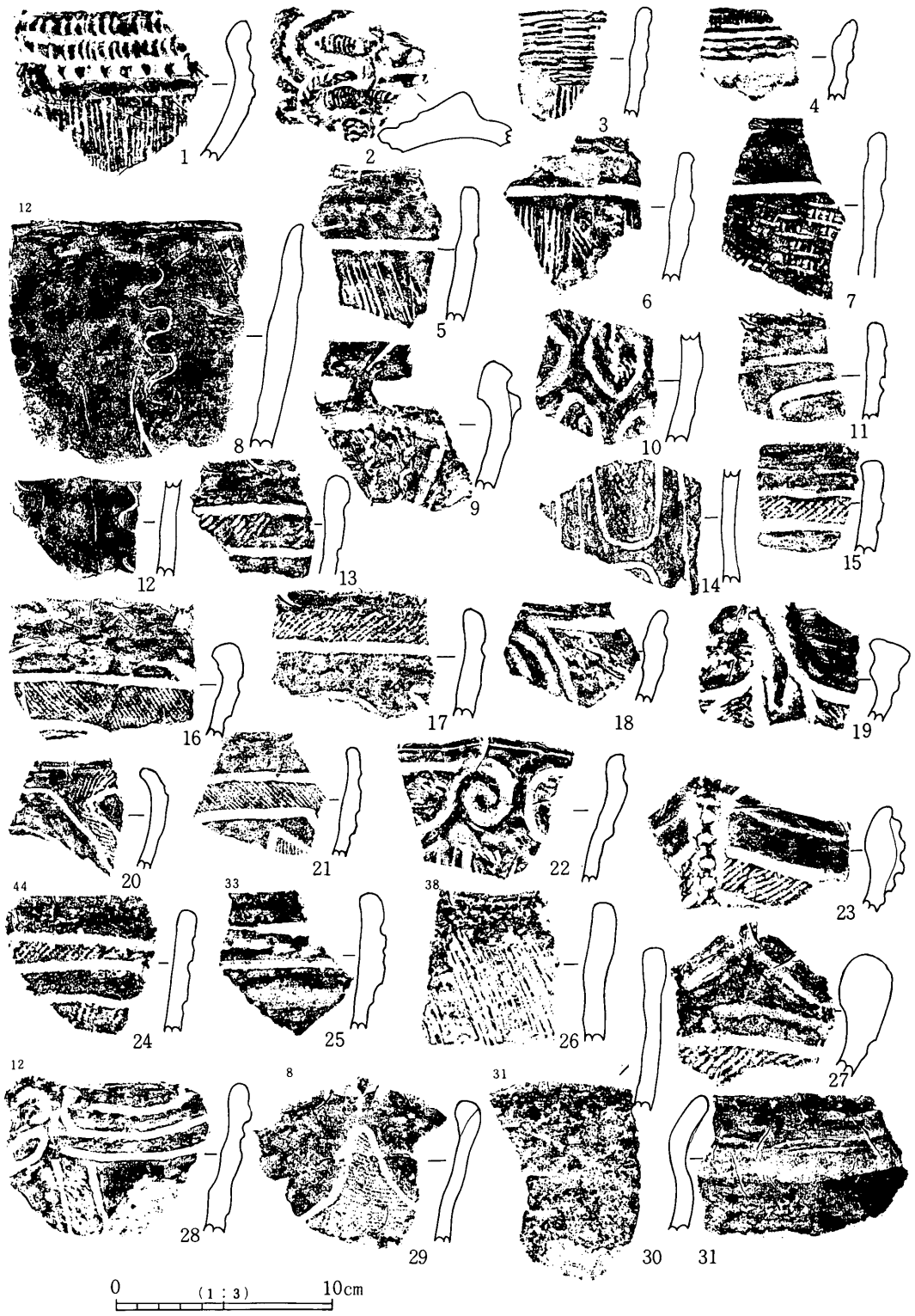
第17图 土壙 (26·28·31·38·50) 出土土器拓影 (1) (小番号 土壙番号)



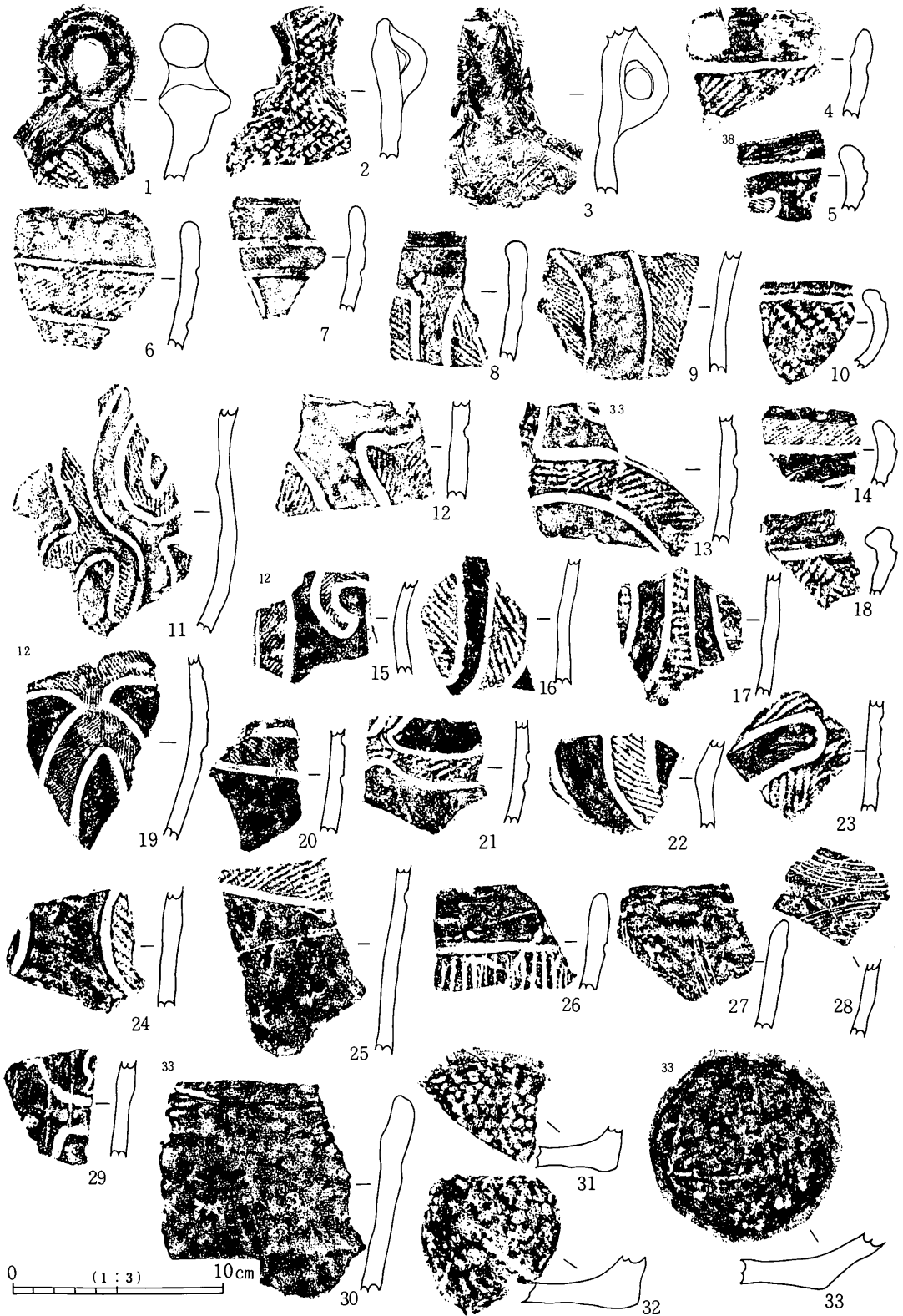
第18图 土壙 (59·60·63·65) 等出土土器拓影 (2) (小番号 土壙番号)



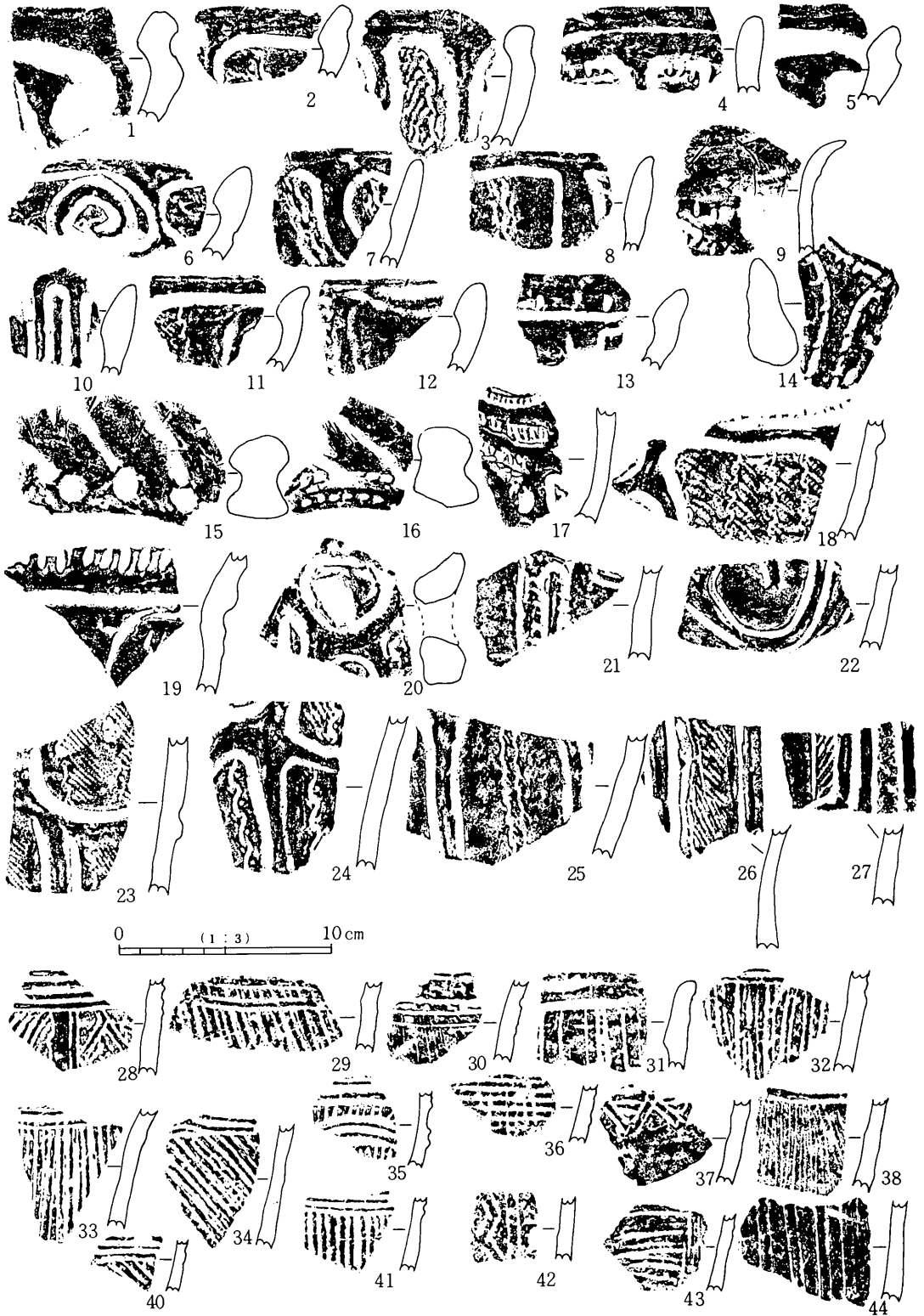
第19图 土壙出土土器拓影 (3) (小番号 土壙番号)



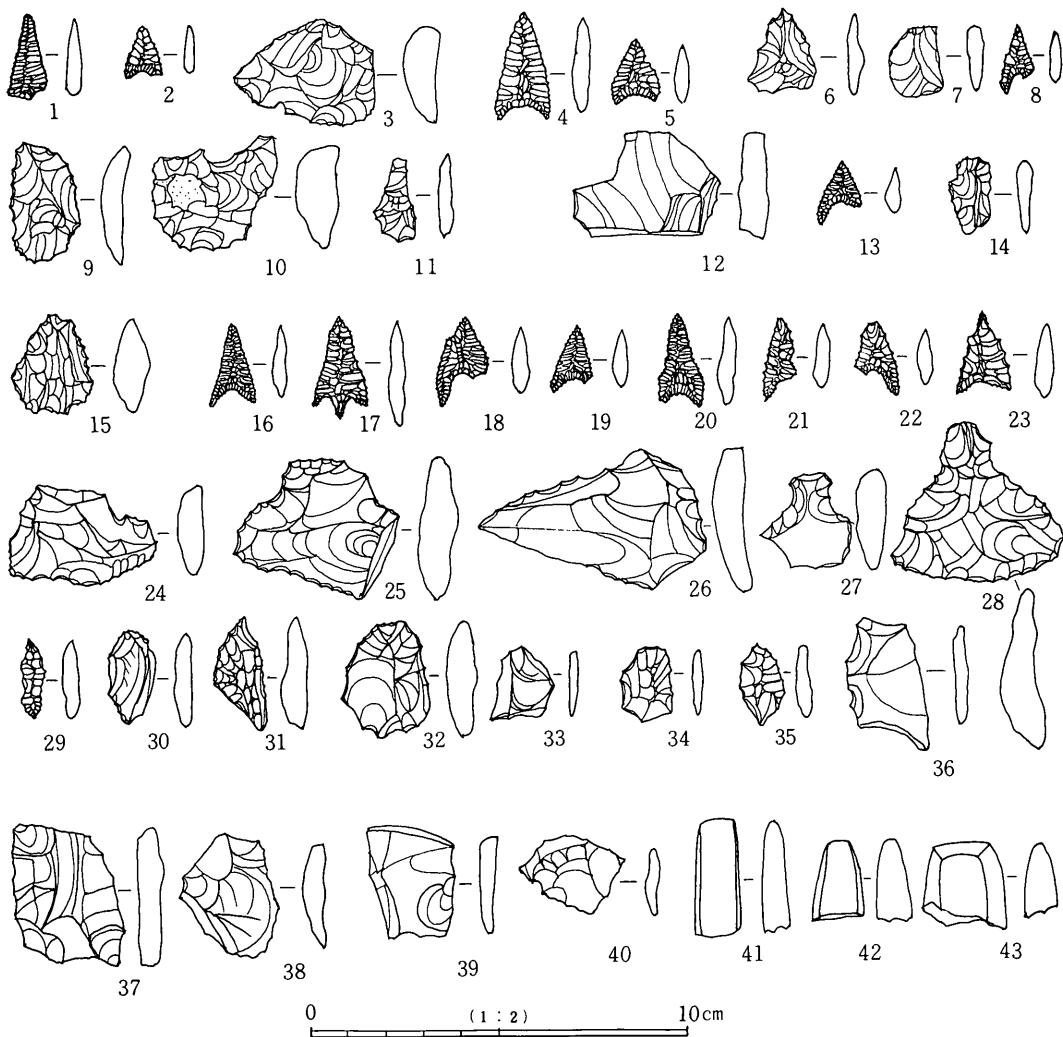
第20図 グリット等出土代表的土器拓影 (1)



第21図 グリット等出土代表的土器拓影 (2)

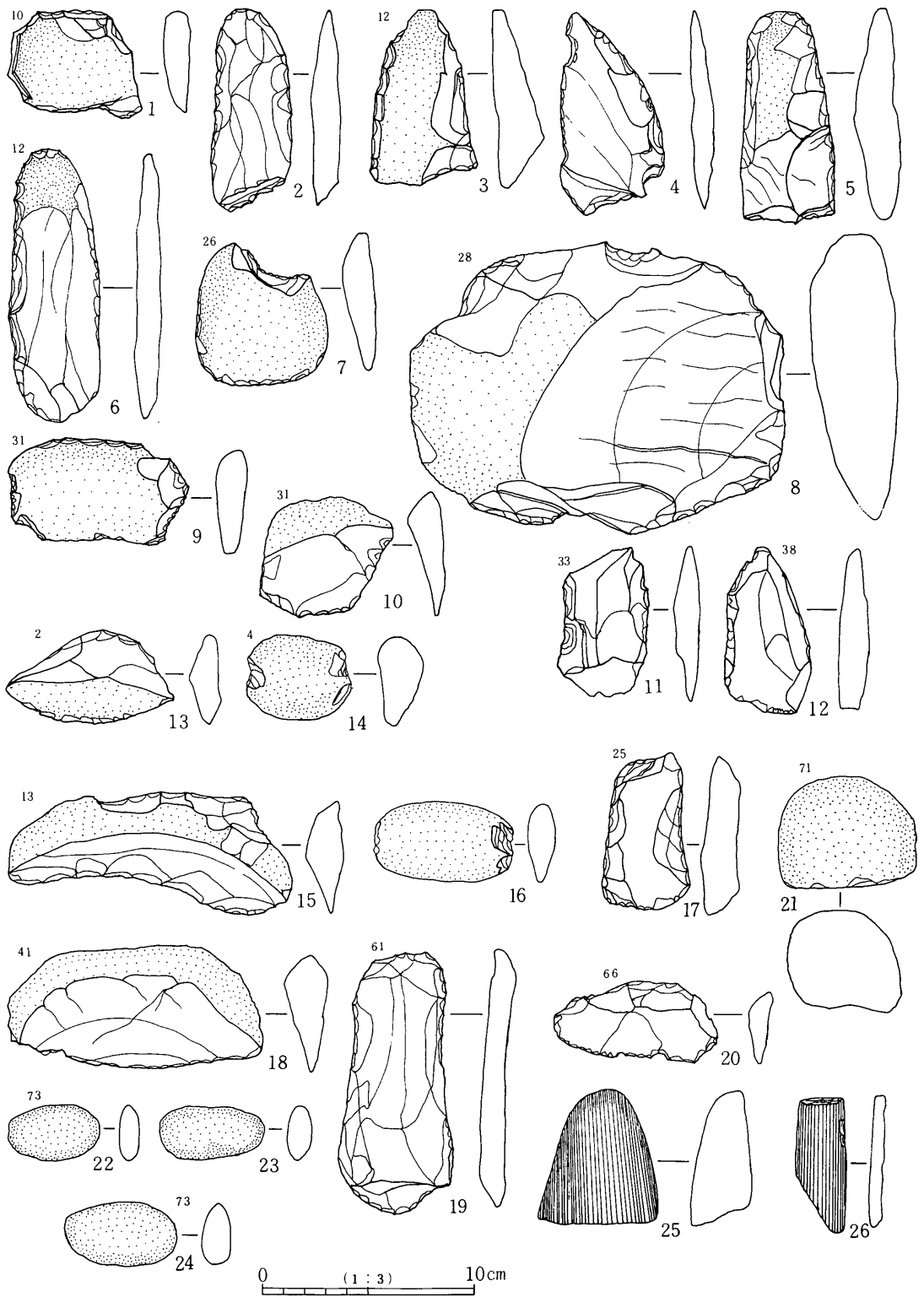


第22図 グリット等出土代表的土器拓影 (3)

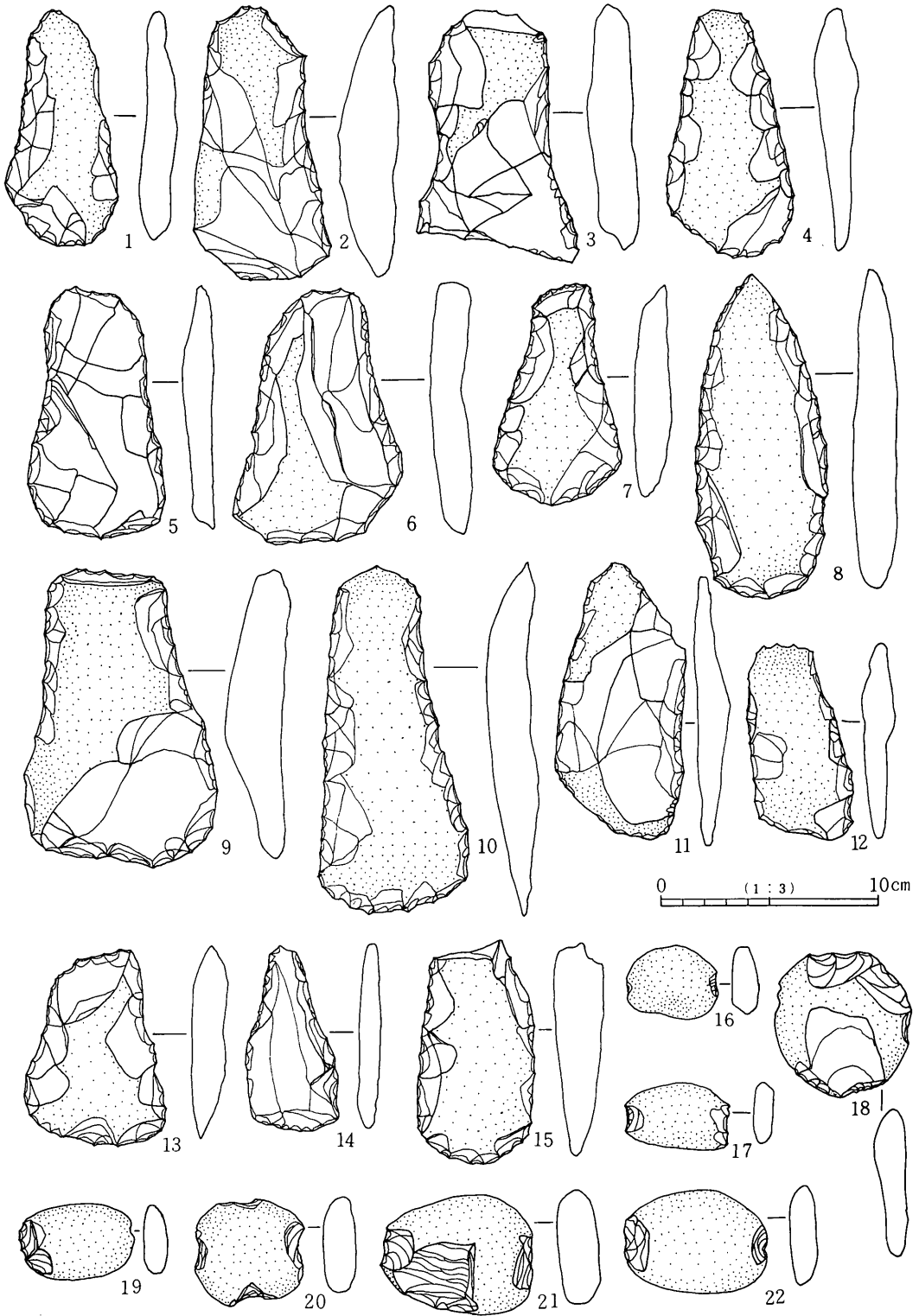


1 ~ 3 · 6 · 7 1号住 4 · 5 3号住 8 ~ 12 土壙12 12 土壙14
 13 土壙16 14 土壙44 15 土壙61 16 ~ 43 グリッド

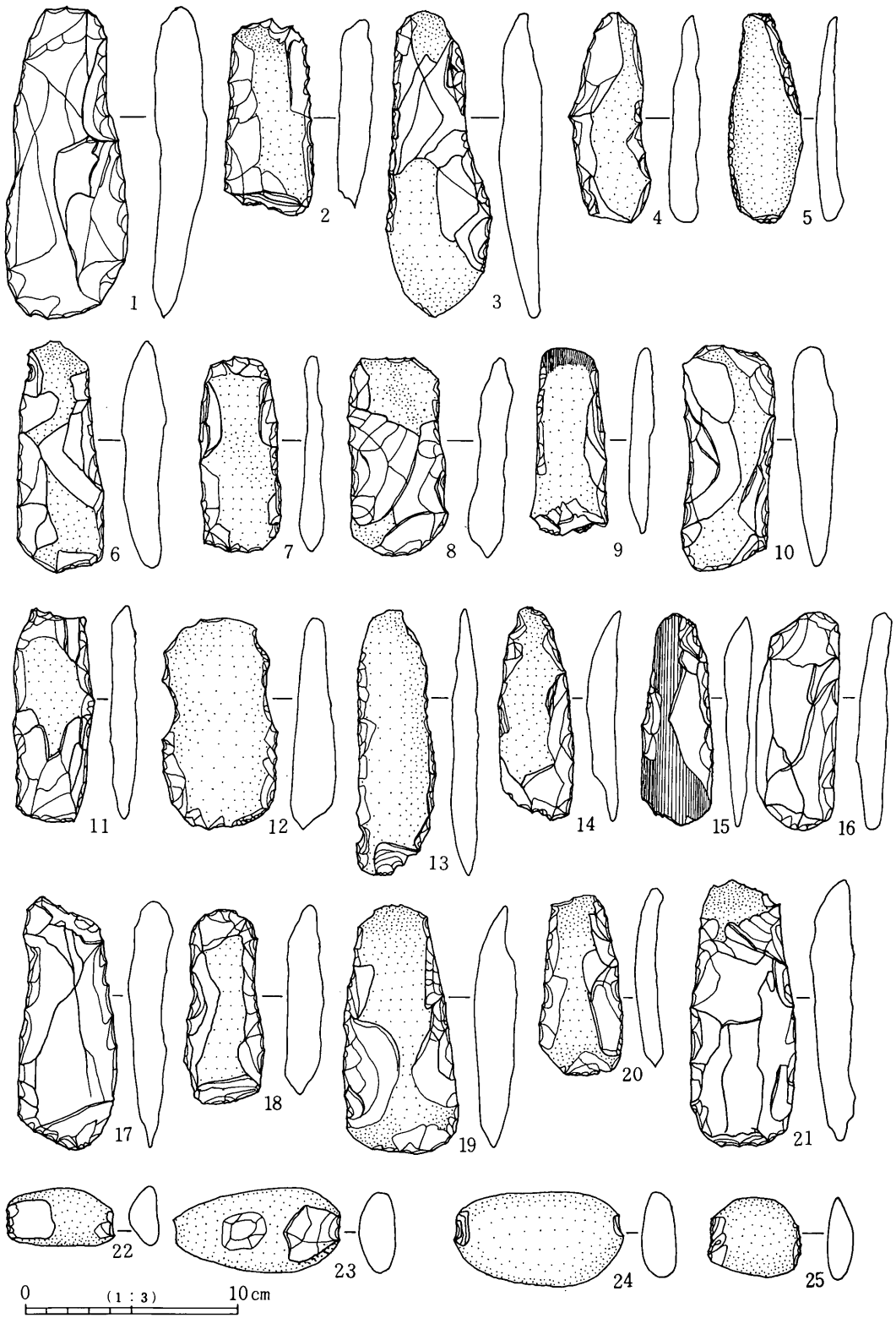
第23図 1・3号住居址、土壙・グリッド出土小型石器



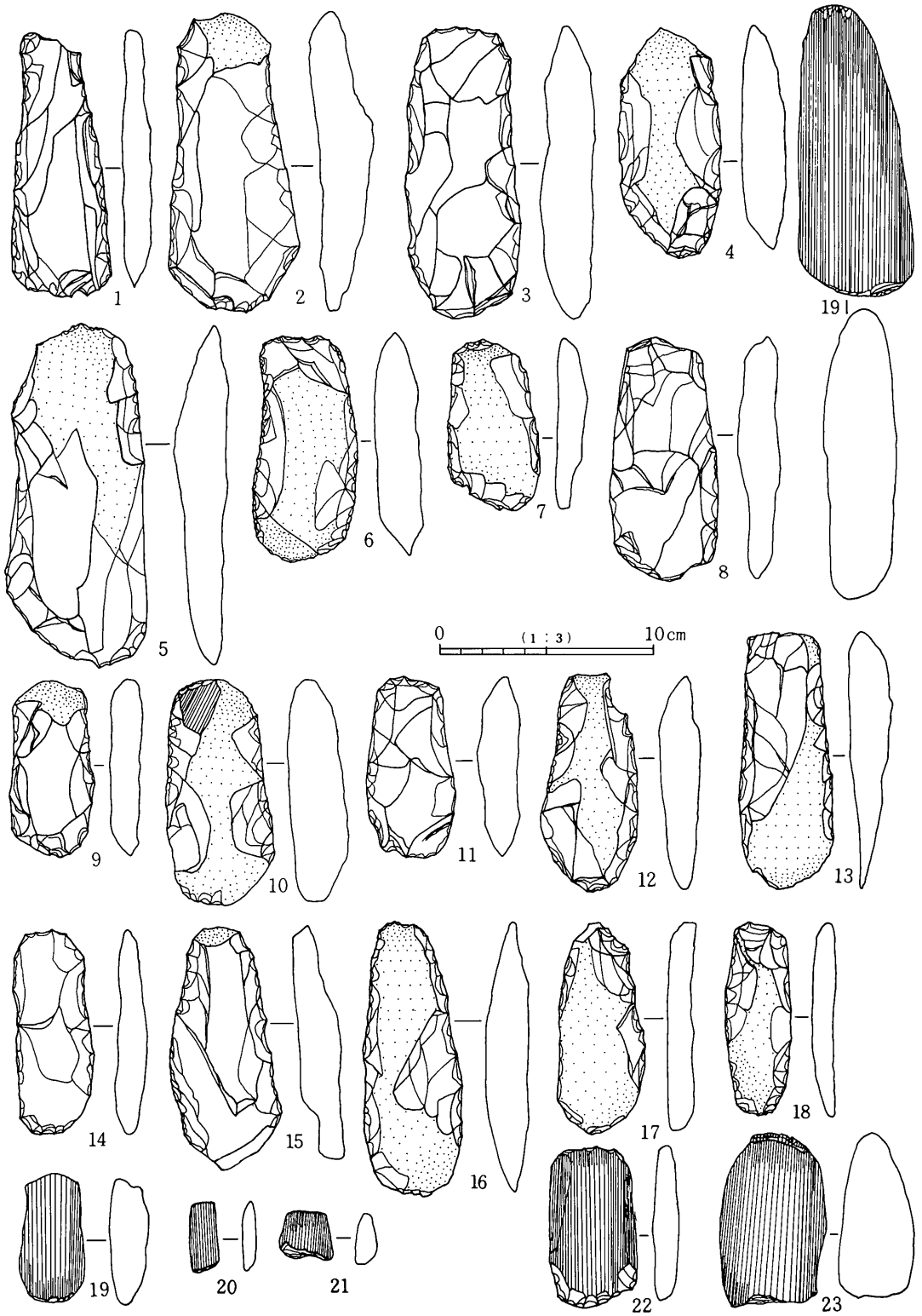
第24图 土城等出土石器



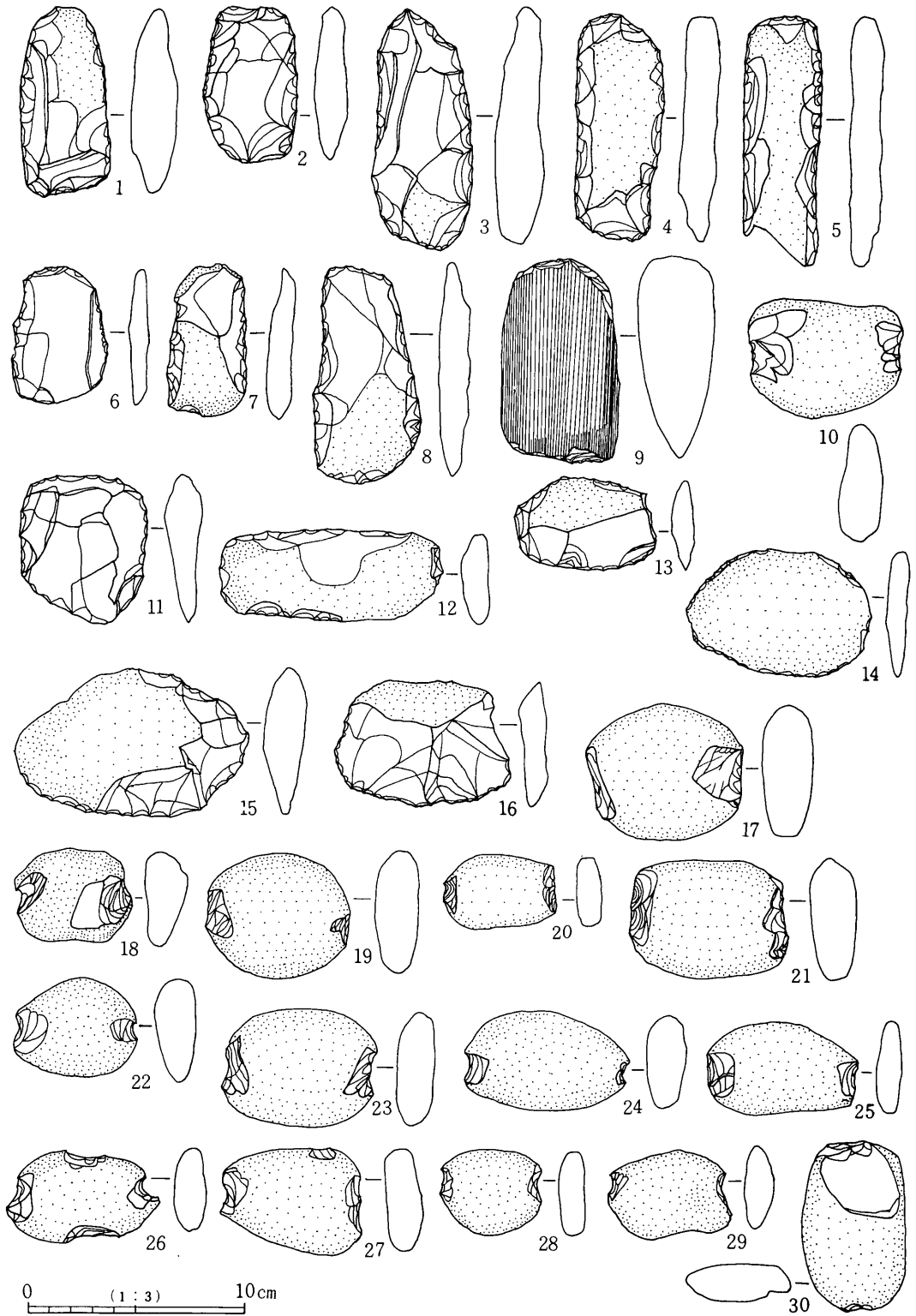
第25図 グリット等出土石器 (1) 主として上方



第26図 グリット等出土石器 (2) 主として上方



第27図 グリット等出土石器 (3) 主として下方



第28図 グリット等出土石器 (4) 小型石器・横刃形・磨製石器・錘石

写真 1 柏原登り口から見た日影林遺跡



写真 2

試掘調査時の遺跡（西南から）



写図 3
1号住居址(西から)・出土片口形土器

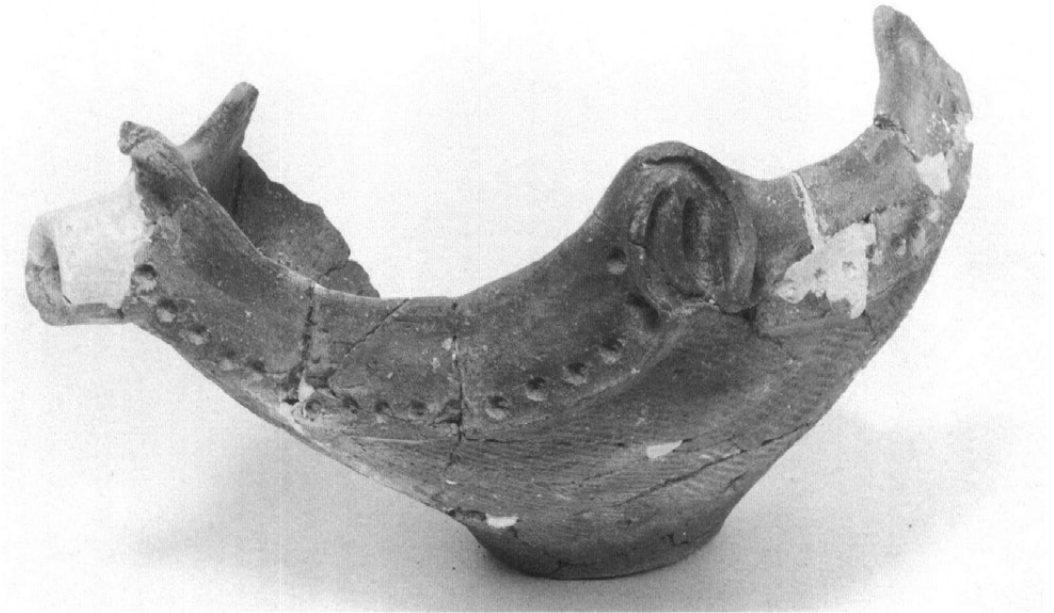


写真 4 2号住居址と石組カマド



写真 5
3号住居址周辺と石囲い炉

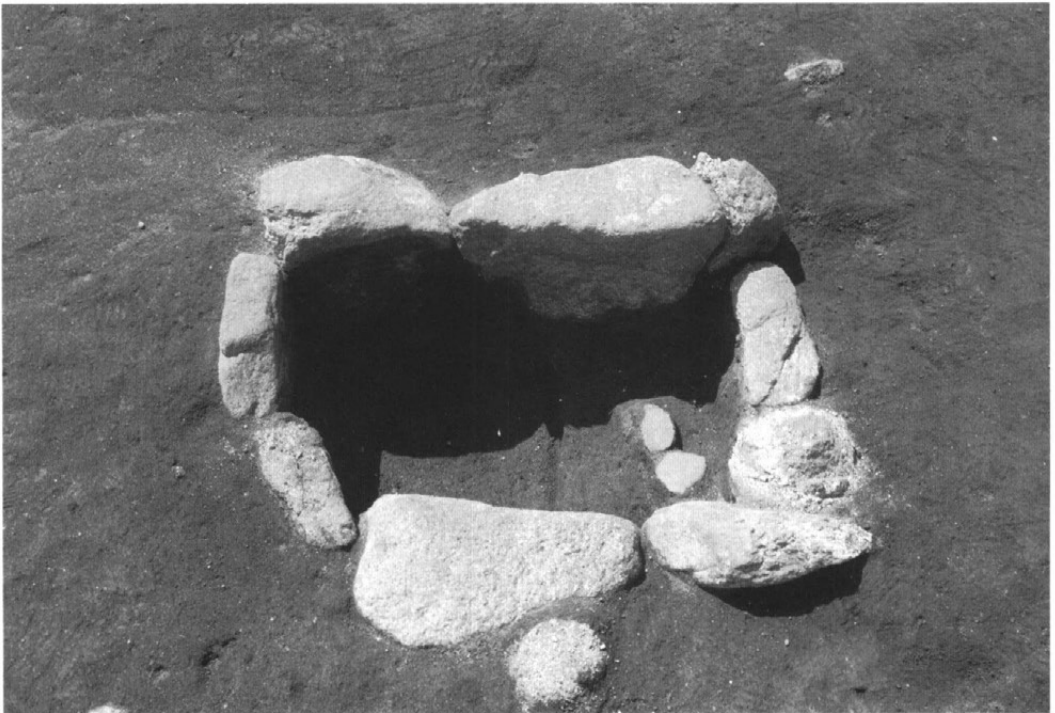


写真 6 土壙群全景（西南から）



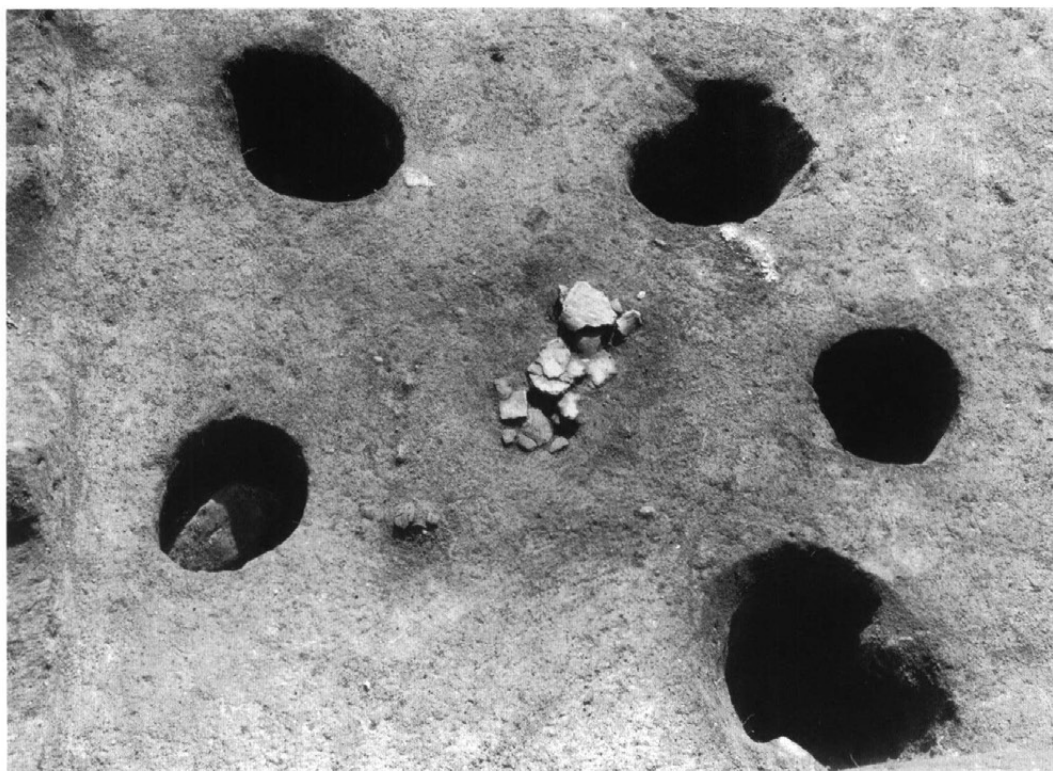


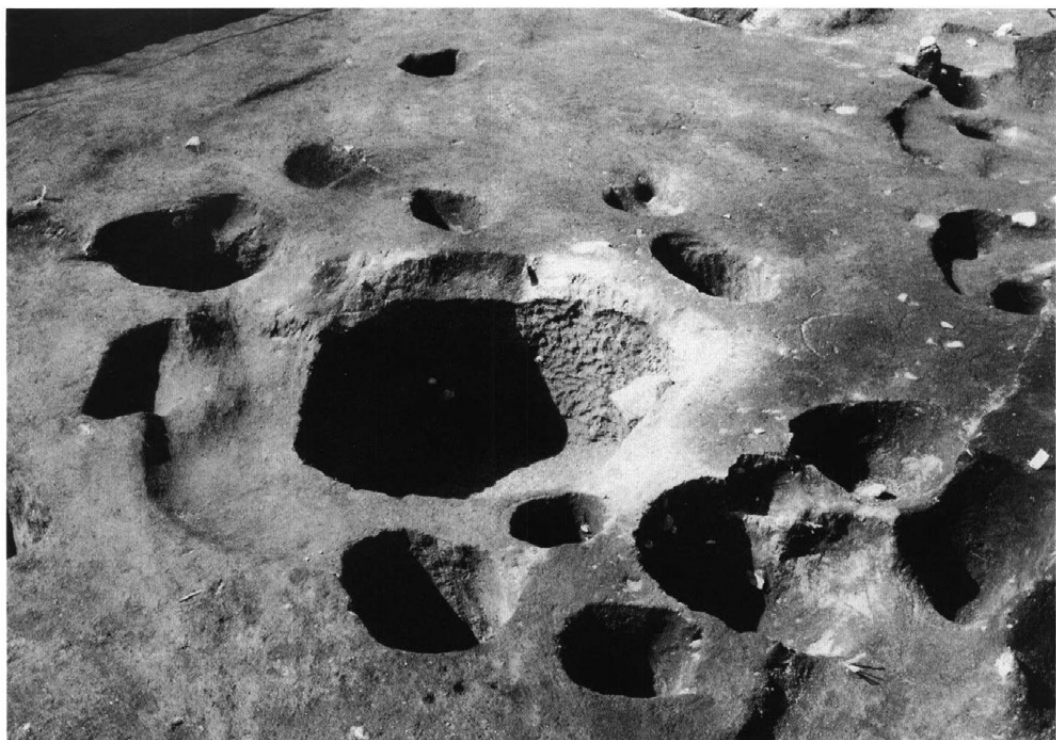
写真7 上方と下方の土壇群・集石遺構2・3



写図 8

ピットを持つ土壙12（上面の焼土とピット・下層の土壙）





1. 土壙 10



2. 土壙 44

写真 10
掘りの深い土壙 19 とグリットの土層



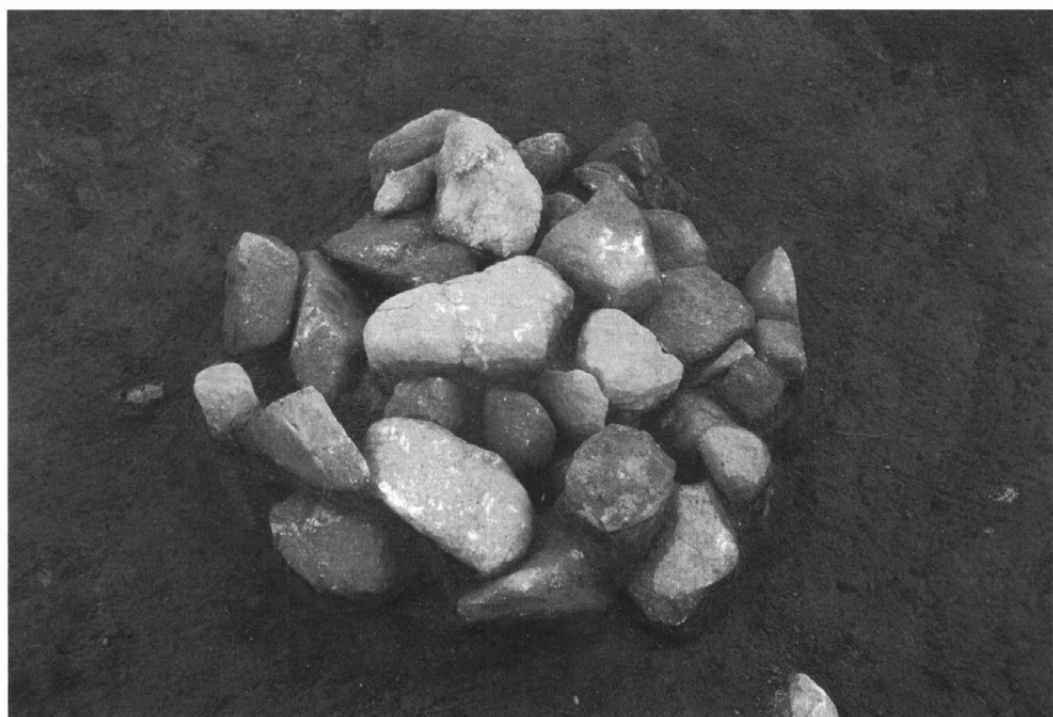
1. 土 壙 19



2. A 地 区 B 53



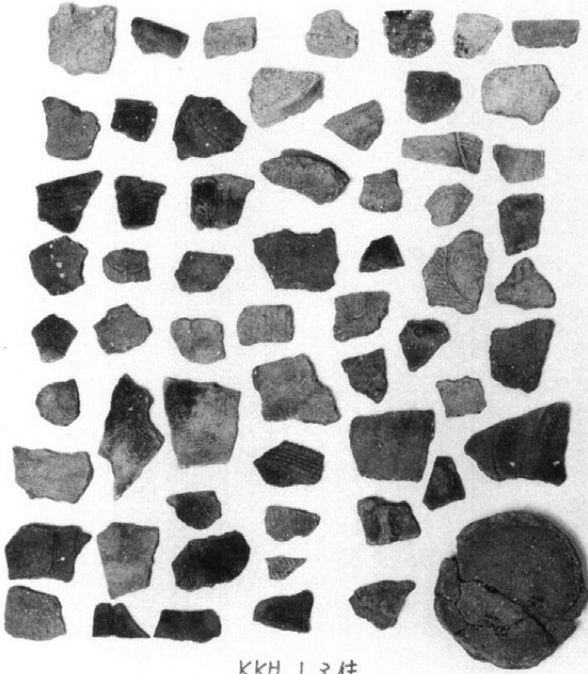
1. 集石 2



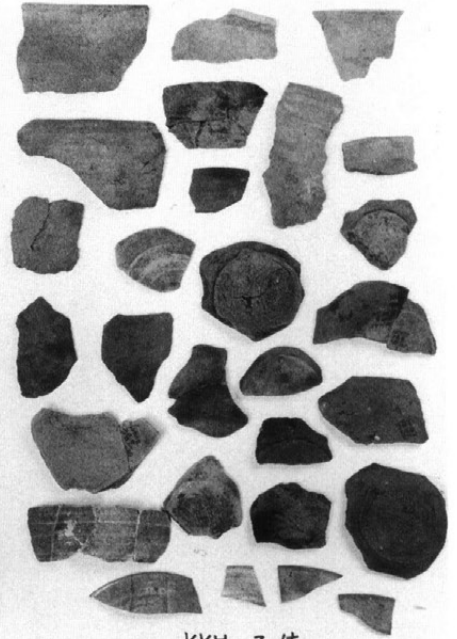
2. 集石 3

写
図
12

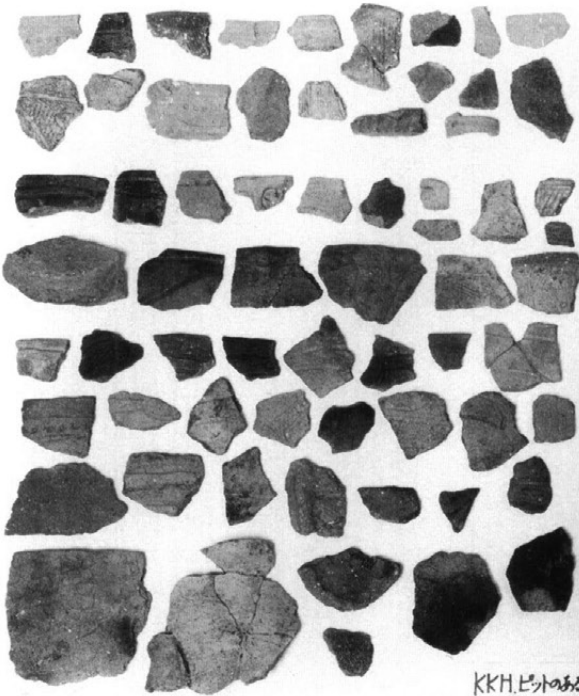
1・2・3号住居址・ピットのある土壇出土土器



KKH. 1.3 柱



KKH. 2 柱



KKH.ピットのある土壇

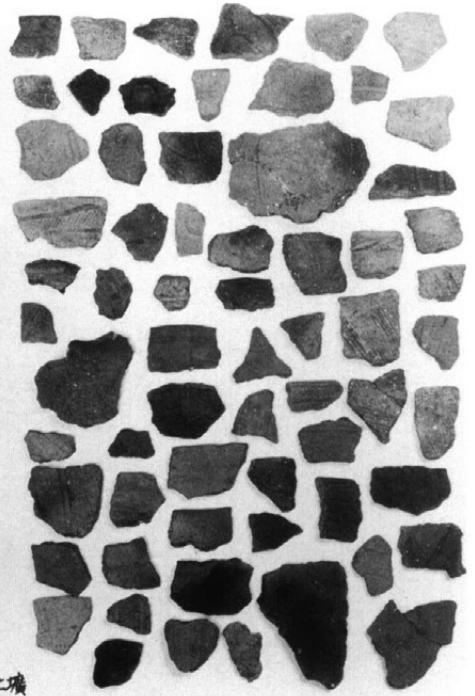
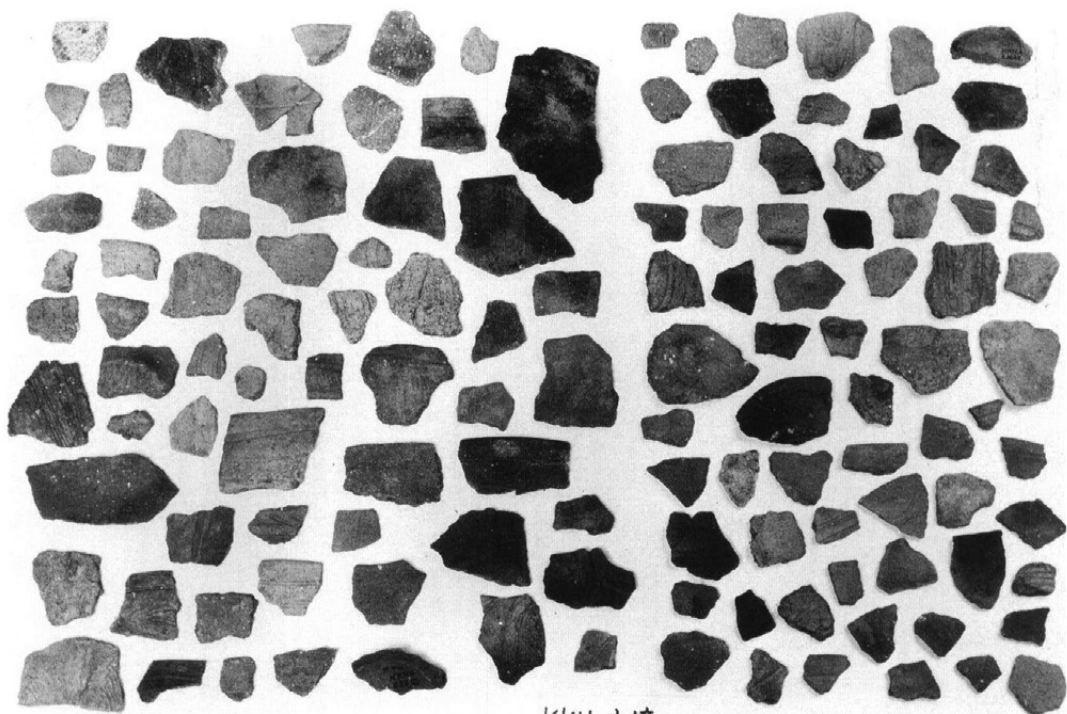
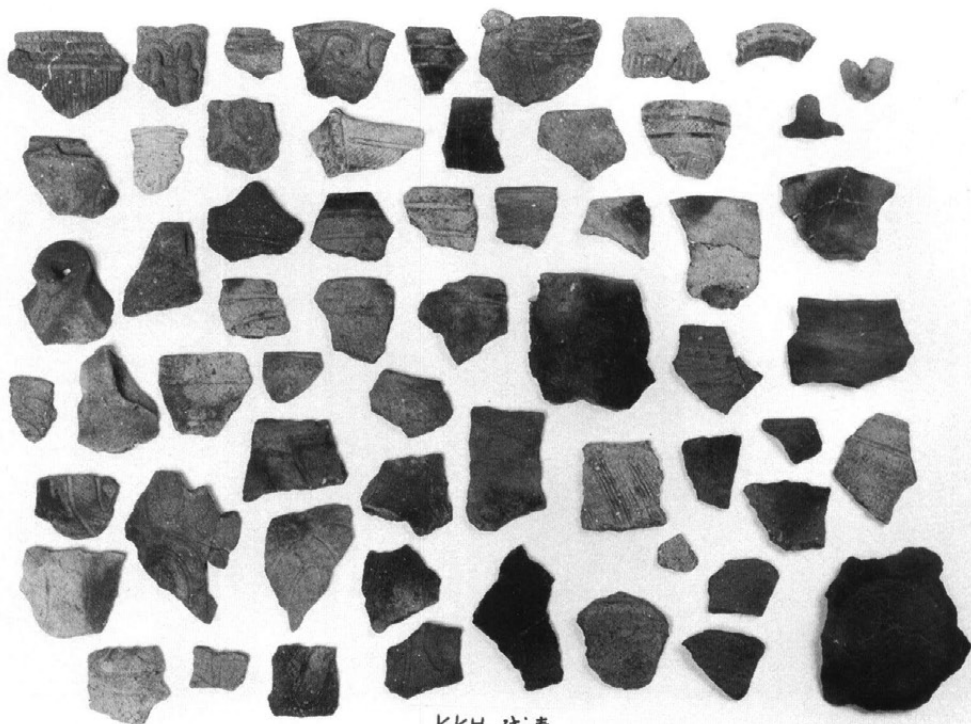


写真13 土壙・グリット出土土器



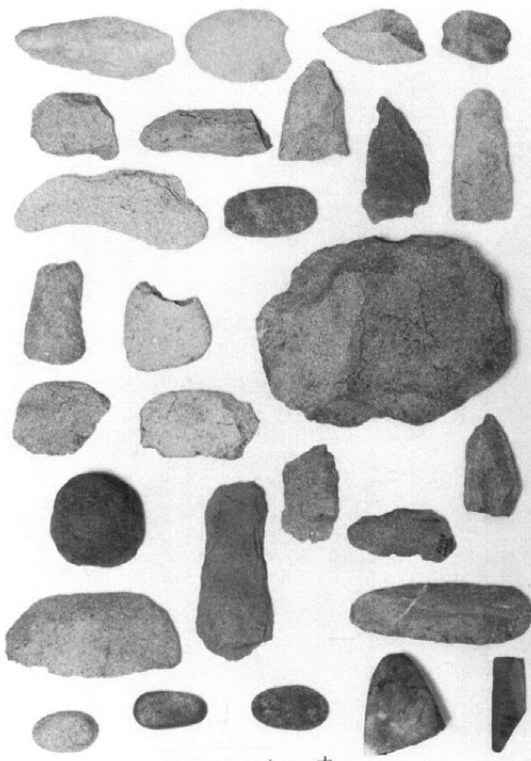
KKH. 土壙



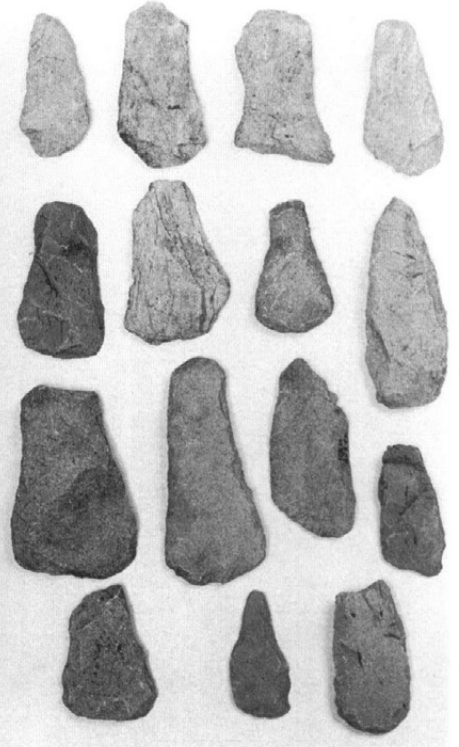
KKH 代表

写図 14

1・3号住居址・土壙・グリット出土石器・土製品



KKH.1.3住.土壙



KKH グリット

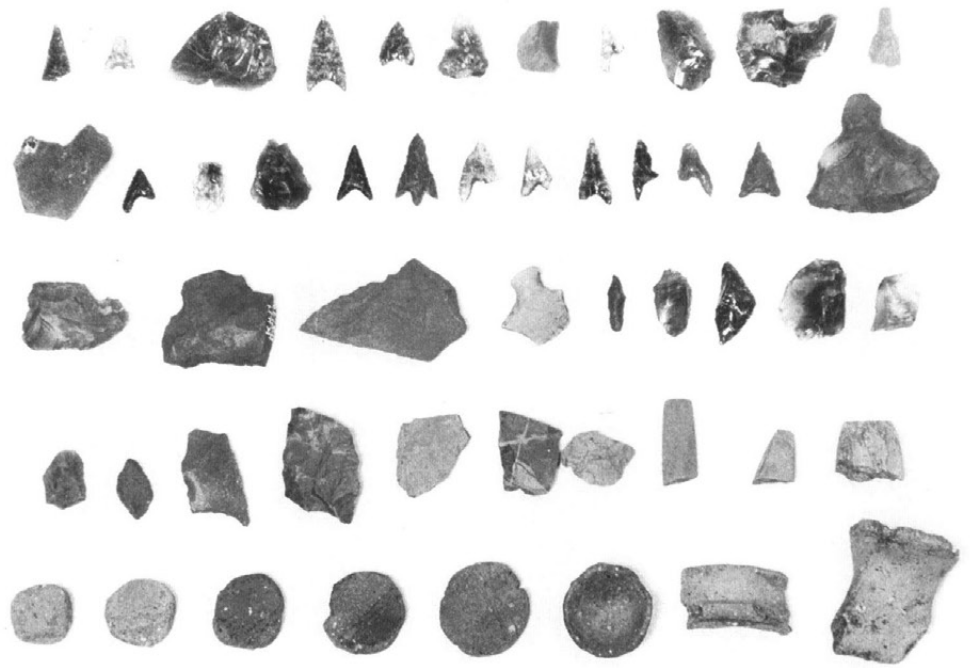
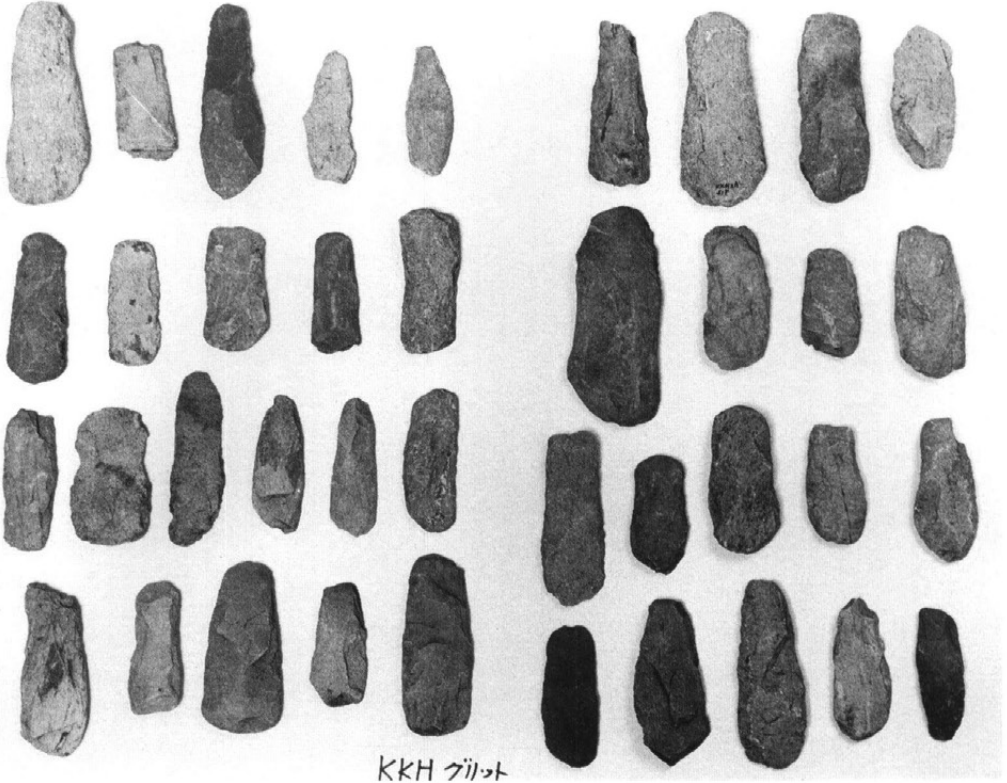
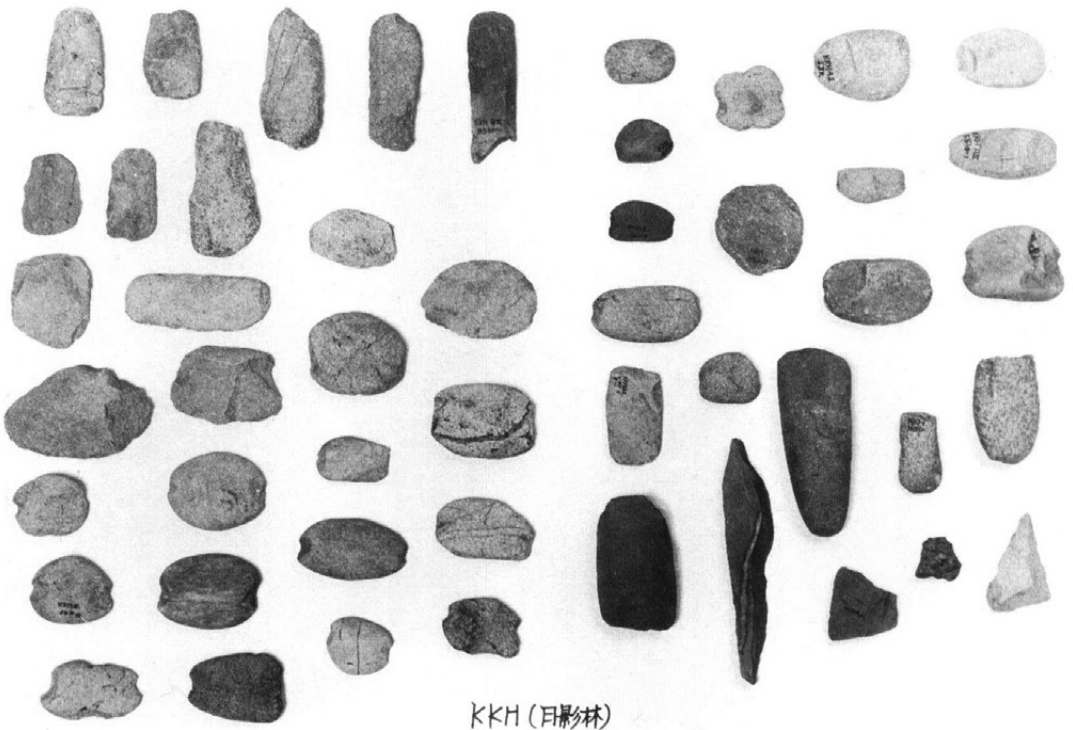


写真15

グリット出土石器



KKH グリット



KKH (目影林)

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書 第19集

日 影 林 遺 跡

—上黒田平林地区住宅団地造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 平成元年4月28日
発行 上郷町教育委員会
長野県下伊那郡上郷町飯沼3092
印刷所 ミウラ企画書籍
長野県岡谷市御倉町2-21
電話 0266(22)4892
